

『餓鬼』

己の性悪さに自覚的な女・榊野透子は、これを活かし作家として評価を得る一方、私生活ではこれを隠し他者との本質的な関わりを避けている。そんな透子が以前の著書の執筆にあたり取材をしていた刑務官・佐田衛は、妻と二人の子を養う一家の主だが、現在は単身赴任中である。ある晩、二人は居酒屋で偶然再会。透子は衛を寡黙だと思っていたが、酔い潰れた彼はやけに喋った。離れて暮らす家族のことを。

翌朝、衛は死刑執行ボタンを押していた。それとほぼ時を同じくして、衛の娘・瑞稀は同級生男子に致命的な危害を加えてしまう。行き場をなくした瑞稀は、衛のパートへやってくる。だがそこに居たのは、昨晚衛を送って帰る瑞稀を呼び止め、誤解を解こうとする透子。ここで瑞稀は以前この部屋で見つけた本の著者が透子であることを知り、彼女に興味を抱く。そこへ衛が鬼の形相で帰宅し、有無を言わず瑞稀を連れ出す。止めに入った透子は「あなたには関係ない」と突き放されるのだった。

やがて透子も事件を知り、瑞稀がその加害者であることを察して複雑な思いを抱く。瑞稀は拘留されて以降、事件について何も喋らず、家族との面会も拒否していたが、透子の著書を読み漁り本人に会いたが、これを受け、事件解決の糸口となればと、透子と瑞稀の面会が実現。向き合って話すうちに瑞稀は透子に崇敬の念を抱き、透子は瑞稀に自身を投影するようになっていく。

そんな中、これを知った瑞稀の母・沙月に迫られた透子は、瑞稀を代弁するように決定的な言葉を吐き捨てる。また衛に対して、彼が散々妻・沙月に言われ嫌気がさしていた言葉を突き付けてしまう。衛は家庭で鬱積させてきた怒りを爆発させ、挑発的な態度で応じた透子について暴行を加える。後日の面会

で、顔を腫らして「私が悪いの」と惨めに笑う。透子に瑞稀は失望。さらにこの様子を見た精神鑑定医が事件を家庭の問題と結びつけようとして、いることを察し、必死で否定する。そしてその後、加害行為が故意でなかったことを供述し、家庭での保護観察処分が下されることとなる。

だが帰宅直後、瑞稀は庇いたかっただけの沙月から「どうして本当のことを言わなかったの」と責められ、胸に秘めてきた真実を告白する。沙月は自身の子育てが間違っていたことを憂い、心中を持ちかける。一方、ニュースで瑞稀の動向を知り胸騒ぎを覚えた透子は、衛から自宅住所の記された郵便物を奪い佐田家へ向かう。だがそこには沙月の亡骸の下敷きとなつて息をする瑞稀の姿があった。救いようのない現実を前にして愕然とする透子。しかしこの先も生きていく瑞稀をこのまま警察に引き渡す気にもなれず、その手を取り逃避行へと出るのだが――。

登場人物

梶野透子：36歳。作家。フリーライター。
 佐田瑞稀：13歳。中学生。
 佐田衛：44歳。瑞稀の父。刑務官。
 佐田沙月：39歳。瑞稀の母。パート事務員。
 佐田孝一：11歳。瑞稀の弟。小学生。
 シロウ：佐田家の飼い犬。
 戸越潤平：37歳。司法書士。
 久保：42歳。衛の同僚。刑務官。
 木島元治：42歳。瑞稀の同級生の父。
 木島由美子：41歳。瑞稀の同級生の母。
 師岡：41歳。週刊誌記者。
 宮川：51歳。刑事。
 田村：32歳。刑事。
 楠田樹：45歳。出版社社員。
 本倉：26歳。出版社社員。
 川井：28歳。出版社社員。
 根津：41歳。出版社社員。
 武夫：65歳。沙月の父。
 峰子：63歳。沙月の母。
 梶野綾乃：61歳。透子の母。
 ※その他、台詞又は特別な役割のある人物
 居酒屋店主
 鑑別所職員数名
 精神鑑定医（初老の女）
 透子の父（電話の声）
 アナウンサー・リポーター
 記者 A・B
 駅員
 電車車掌
 フェリー乗り場職員
 フェリー客室乗務員
 バス運転手
 ヤクスギランド職員
 刑事数名
 拘置所職員
 検察官（地裁）
 弁護士（地裁）
 薄黒い少女
 裁判長（家裁）

○河川

橋のかかった緩やかな流れの河川。
川べりの芝生の広場には、家族連れ、犬
の散歩をする者など。

○橋の上

歩きながら電話をかける榊野透子（36）。
相手は母・彩乃（61）である。

透子「あ、ごめんね、さっき出られなくて。

何かあった？」

彩乃の声「何にもないけど、あんたほっとく

と全然音沙汰ないから。元気にしてるの？」

透子「うん。元気、元気」

彩乃の声「ならいいんだけど」

透子、広場で娘とキャッチボールをする

男に目を留め、欄干の方へ歩み寄る。

立ち止まり、手すりに手を添える。

下にくつつついていた水滴が落ちる。

○川べり

キャッチボールをしている佐田瑞稀（13）

とその父・衛（44）。

近くのベンチに座っている母・沙月（39）。

そこから、新しいグローブをはめ、真っ

白いボールを一つズボンのポケットに入

れた弟・孝一（11）が駆け出す。

○橋の上

佐田一家の様子を眺める透子。

衛が瑞稀と孝一に交互にボールを投げる。

慣れない様子の孝一には優しめの球。

ベンチの沙月、携帯を瑞稀と孝一の方へ

向けて写真を撮っている。

彩乃の声「で、どうなの最近。いい人とかは？」

透子「ご縁がありませんね」

彩乃の声「ご縁って言ったって、待っていてあ

るもんじゃないでしょう。あんたが望まな

いことには……」

透子「わかってる。何度も聞いた」

彩乃の声「心配なんよ。お母さんたちもいつ

までも元氣じゃいられないだし、あなたには普通に結婚して、できたら子供も産んで、幸せになつてもらえたらつて」

透子「そうね。そういうのもいいかもね」

欄干から離れ、歩き出す。

彩乃の声「あんたの仕事だつて、お母さんどういうものかよく知らないけど、女が一人で地に足のつかないことやつて生きてくのかって限界があるじゃない。若いうちはどうにかなつたつて、現実つてそうそう」

透子「（遮り）ごめん。この後用事あるから、悪いけどまた今度」

○川べりの道

衛らを横目に見ながら歩く透子。

アマガエルの鳴き声が聞こえる。

衛の投げたボールを取り損ねる瑞稀。

ボールは透子の方へ転がつて来る。

それを追つて一人駆けて来る瑞稀。

孝一がポケットから真っ白いボールを取り出し、大きく振りかぶつて高く投げる。

直後、空を指さし、はしゃぎ出す。

ボールをキャッチし、衛も上を見て笑う。

空には薄つすら虹が架かっている。

転がるボールに追いつき拾う瑞稀。

その先の茂みに何かを見つけ、手にしたボールを思いきり投げつける。

アマガエルの鳴き声が途絶える。

透子のすぐ近くまで転がつて来るボール。

瑞稀は茂みの中を見つめ、止まっている。

ボールを拾う透子。

透子に気づく瑞稀。

ボールを返そうとする透子。

背を向け、行つてしまふ瑞稀。

透子、立ち尽くし、ボールを持ち変える。

手に、赤黒い粘液がついている。

○タイトル

『餓鬼』

○透子の部屋（夜）

壁につけて置かれた机。
ノートPCのキーボードを叩く透子。
ふと手を止め、机の端に置いてあった野
球ボールを引き寄せ、手前から奥に向か
って転がしてみる。
壁に当たって戻って来るボール。
人差し指で止める透子。
指先の触れている辺りに赤いシミがつい
ている。
ボールを元に戻し、PCを閉じる透子。

○ピアノ教室前（夜）

住宅街の中に『○○ピアノ教室』という
木製の素朴な看板を掲げた家が一軒。
道の端に一台の車が停まっている。
ピアノ教室から出てくる瑞稀。
やがてワルツ調の音色が聞こえてくる。
車のドアを開ける瑞稀。室内灯が点く。
沙月の明るめの色のカールがかつた髪に
オレンジの光が反射し艶を強調する。
ドアを閉める瑞稀。室内灯が消える。

○透子の部屋（夜）

豆電球の点いた薄暗い室内。
目を開ける透子。ベッドの上。
天井に蜘蛛の巣が張っている。
しばし見つめ、目を閉じる透子。

○走る車の中（夜）

田畑に囲まれた暗い道を走る車。
沙月、車を運転しながら、
沙月「月謝だつて安くないし、お母さん他に
やらなきゃいけないこといっぱいあるのに
瑞稀「だからやめるって」
沙月「そういうこと言ってるんじゃないでし
よ。ろくに練習もしないで。どうしてそう
一生懸命になれないのよ」

助手席の瑞稀、窓の外を見ている。

沙月「孝一なんて自分で目標見つけて勉強だ
って頑張ってるし、野球も中学入って出遅
れないようにって、毎日必死で素振りして」
瑞稀「あの子が一生懸命なのは、一生懸命な
ところをあなたに見せること」

沙月「あなたって……ああもう、あんたと話
していると、お母さんいっつも見下されてる
気がする……！」

目を赤らめ涙ぐむ沙月。
瑞稀、その横顔をじっと見た後、ダッシ
ュボード下をガンと蹴る。

○透子の部屋（夜）

目を開ける透子。
天井の蜘蛛の巣は消えている。
ベッドに寝転んだまま、先ほど蜘蛛の巣
が見えた辺りを覆うように左手をかざす。
しばし自分の手を見つめる。

○走る車の中（夜）

沙月、顔を真っ赤にしてハンドルをぎゅ
っと握り、
沙月「……私さえ、私さえいなくなれば、あ
んな気が済むんでしょ！」
窓の外を流れる街灯の間隔がどんどん狭
まっていく。
瑞稀、黙って前を見据えている。

○透子の部屋（夜）

上にかざした左手の指の隙間から一匹の
蜘蛛が糸を垂らして降りてくる。
透子、その様子をじっと見た後、右手で
バツと蜘蛛を掴む。
その手を開く。何もない。

透子「（ボソボソと）お前はどこへも逃げない。
なのに私はお前を消せない」

数秒天井を見つめ、突如吹き出す。
そのままガラガラと笑い転げる。

○佐田家・玄関（夜）

ポストンバッグを持った瑞稀。

その腕を掴む沙月。

沙月「よしてよ。お母さんが悪かったから」

瑞稀「私が消えるって！」

沙月「(溜息)お母さんさつきはちよつと……

ねえ、わかって？あんたが居なくなったら、お母さん心配で眠れなくなっちゃうよ」

○同・リビング(夜)

戸越潤平(37)が孝一に勉強を教えている。

瑞稀の声「離してよ！」

戸越、ちらりとドアの方を見る。

すりガラス越しに瑞稀と沙月がバタバタしているのが窺える。

戸越「先生ちよつと」

と立ち上がる。

孝一「いいよ。いつものことだし」

○透子の部屋(夜)

笑い続けている透子。

やがてベッドから転げ落ちる。

床でも尚、体をよじらせ笑い続ける。

が、次第にその表情に苦悩が滲み、声が消え、体が小さく丸まっていく。

○佐田家・玄関(夜)

玄関のドアを開け、瑞稀が出て行こうとしている。

外で犬が吠えている。

必死で瑞稀にすがりつく沙月。

リビングから戸越が出て来て、瑞稀の腕を掴み、

戸越「瑞稀ちゃん、ちよつと落ち着こうか」

と瑞稀の手をドアノブから離させる。

リビングのドアの前に立ち、呆れた顔で見ている孝一。

沙月「(戸越に)すみません」

後ろ手に玄関の鍵をかける。

○透子の部屋・玄関(夜)

玄関のドアを開け、外へ出ていく透子。

○居酒屋（夜）

こじんまりとした居酒屋。

透子が入って来る。

店主「いらっしやい。お一人？」

透子「（会釈し）寝酒を」

カウンター席に掛ける。

透子「麦……ロックで」

店主「はい」

椅子一つ空けて男性二人連れの客。

透子側に座っているのは衛の同僚・久保

（42）、その奥には衛がいる。

衛の声「大将、大将、もう一杯。仕上げね」

久保「さっきもそう言ったじゃないですか。

俺ちよつともう失礼しますよ」

衛の声「へえ？いいよなあ、久保は。待って

る家族がいるもんなあ」

久保「またそれだ」

財布から数千円出し、テーブルに置いて、

久保「とにかく、ほどほどにしてくださいよ。

明日遅れたら洒落にならないですからね」

適当に手を挙げ、久保を見送る衛。

透子「（衛に気づき）あれ、佐田さん？」

衛「ん？……ああ、本の人！」

透子「（笑い）そうです、そうです、本の人。

その節はありがとうございます」

衛「ああ、いやいや何も」

店主、透子と衛にそれぞれの酒を出す。

透子「（店主に）随分飲んでらっしゃるんです

か？寡黙な人だと思ってたから」

衛「（さっそく酒を口に運び、横から）大して

飲んでないですよ」

透子と店主、顔を見合わせ少し笑う。

○佐田家・玄関（夜）

玄関で戸越を見送る沙月。

沙月「ごめんなさい。お恥ずかしいところを」

戸越「いえ。どこの家庭にもあることだと思

いますよ。難しいお年頃ですし」

沙月「ええ……」
戸越「でも、少しお節介かもしれないんです
が、佐田さん、もつとご自身のことに目を
向けたらいいんじゃないですか」
沙月「え？」

○同・瑞稀の部屋（夜）

ポストンバッグをベッドに放り、ドアに
背をつけて座っている瑞稀。
沙月と戸越の会話が微かに聞こえる。
戸越の声「何か趣味とか、資格の勉強とか。
あんまり根詰めて瑞稀ちゃんや孝一君のこ
とばかり考えてたらもたないでしょう」
沙月「声「いえ……私、趣味なんかありません
し、資格なんてとでも。学もないので」
戸越「声「そんなこと。佐田さんのおかげで、
うちの事務所だって随分助かってるんです」
ドアの前を離れ、机へ向かう瑞稀。
一番下の引き出しを開ける。

沙月「声「そう言っていただけ」
戸越「声「本当に、もし私で力になれること
があれば何でもお手伝いします」
沙月「声「そんな。戸越さんには孝一のこと
だけでも大分甘えてしまっているのに」
引き出しの奥から一冊の本を取り出し、
ドアの前に戻る瑞稀。
戸越「声「いいんですよ。好きでやってるこ
とですから」
しゃがみ、本をめくる瑞稀。
表紙には『そのボタン 遠野マスオ』と
ある。

○居酒屋（夜）

衛、席を一つ詰め、椅子一つ分空けて透
子と話している。
衛「でね、お姉ちゃんが、シロウが連れて行
けないなら、って言うから」
透子「（店主に）？」
店主「犬ですよ、犬」
衛「そう、犬に負けての単身赴任」

透子「(困った笑みを浮かべつつ)……あ、そのういえばこないだ娘さんたち遊びにいらしてたんじやないですか？河原でキャッチボール……佐田さんでしたよね？」

衛「え？ああ、そんなところを」

透子「あ、やっぱり。すみません。ちよつと邪魔しちやあれかと思ってお声掛けできなくて。ご自宅あの辺なんですか？」

衛「ええ。あそこから3分くらい」

透子「あら、じゃあ結構近所かも」

衛「へえ。やあ、でもね、やつと下の子が野球始めるって言うんで。お姉ちゃんの前からやってたんですけど、やっぱりああいうのは男の子のがね」

透子「……そうだ、ボール。私拾って娘さんに返そうとしたんですけど、不審だったのか受け取ってもらえなくて。今度お返ししますね」

衛「ああ、すいませんね。人見知りなところがあるのです。ボールは替えがありますから、適当に処分していただければ」

透子「いや……ちよつとそれは。かと言って私が持っているのも、なんだか」

○佐田家・瑞稀の部屋(夜)

本を読んでいる瑞稀。

「奴は死刑になりたくて二人殺したのだと言った。死刑にならなくても構わないとも言った。大きな力の制圧の下、もう自らの悪性に振り回されることもなく、ただ弱者への贖罪のためだけに残りの人生を費やせたなら、どれだけ楽かと――」
ドアの下からメモ書きが挿し込まれる。
それに目を落とす瑞稀。
「ごめんね。ケンカしちゃうこともあるけど、お母さんはいつも一緒にいたいと思ってるよ。おやすみ」とある。
しばし見つめ、視線を本に戻す瑞稀。
「――まったたく同感だ。いっそ今日の前にあるこのボタンに“そのボタン”という

ラベルでも貼ってもらえたなら、俺は一体どれほど救われるだろう―』
真剣に読み進める瑞稀。

○タクシー内（夜）

衛を押し込むようにして、後から透子が乗る。ドアが閉まる。

透子「佐田さん、ご住所は？」

衛「うん：：○○県○○市」

バッグミラー越しに見る運転手。

衛「○○町○」

透子「（遮り）は遠いのです？」

衛「ん、ああ：：××町×丁目××の××、××コーポ102」

透子「（小さく）はい、よくできました。（運転手に）お願いします」

発進するタクシー。

○アパート・外（夜）

千鳥足の衛、それをそっと支えるようにしながら付き添う透子。

102号室の前に立ち、ドアノブを掴みガチャガチャやる衛。

透子「（困り顔で）佐田さん、鍵」

衛、ポケットを漁り、鍵を取り出し、

衛「鍵（と透子に渡す）」

透子、受け取り、不服げに小さく首を傾げ、ドアの鍵穴に挿し込む。

○衛の部屋・玄関（夜）

入るなり、玄関に倒れ込む衛。

スイッチを探り、電気を点ける透子。

すぐ横に流しがある。

透子、玄関に立ったまま手を伸ばし、コップを一つ取り、水を汲む。

○佐田家・廊下（夜）

パジャマ姿の沙月、廊下の電気を消す。瑞稀の部屋のドアの下から明かりが漏れている。

それを見つめる沙月。

○同・瑞稀の部屋（夜）

本を一番下の引き出しに戻す瑞稀。
続いて一番上の引き出しを開け、奥から
クツキーの缶を取り出す。
その蓋を外すと、中に詰められていたメ
モ書きが、ワサツと嵩を増す。
その上に新たな一枚を重ね、蓋をする。

○衛の部屋・玄関（夜）

透子「上半身を起こし、水を飲む衛。
透子「それじゃ、風邪ひきますから、ちゃん
とお布団で寝てくださいね」

出て行くこうとする透子。
衛、透子の服を掴み、また寝転がる。

透子「お父さん一人にしないでよ……沙月」

透子「は頑として掴んだまま寝息をたて始める。
透子「（衛の寝顔を見て呟く）……沙月だつて
お父さんと一緒に居たかったよ。なんで無
理にでも連れてつてくれなかったのかな」

○拘置所・刑場（朝）

目隠しされて暴れる死刑囚、縄に掛けら
れる。

○中学校・体育館（朝）

鳥が一羽迷い込み、外へ出ようと錯乱し
て何度も窓にぶつかる。

○拘置所・ボタン室（朝）

それぞれボタンを押す三人の職員の手。
カラカラと勢いよく回る滑車の音。

○中学校・体育館・二階通路（朝）

重りを吊るした紐を握る少女の手。
その手が開かれ、スルツと紐が滑る。

○拘置所・外
門を出る衛。携帯が鳴る。

○中学校・校庭
校庭にパトカーが数台停まっている。
体育館の上の窓から鳥が一羽飛び立つ。

○衛の部屋・玄関

壁に頭を預けて眠っていた透子、目を覚
ます。

申し訳程度に布団が掛けられている。
透子、首を鳴らしながら腕時計を見る。
11時半を回っている。

透子「（項垂れ）おお……」

床にメモ書きが置かれている。
曰く、『昨晚はご迷惑をおかけして申し訳
ありませんでした。お詫びはいずれ。戸
締りはどうぞお構いなく。佐田』

丁寧に布団を畳む透子。

隣室からテレビの音声が漏れ聞こえる。
テレビの音声「○○死刑囚の刑が本日執行さ
れました。これで○○内閣三度目の死刑執
行となります。続いてのニュースです。今
朝8時半頃、○○県○○市内の中学校体育
館で朝練中の男子生徒に上から落下してき
た重りが直撃し、現在意識不明の重体との
ことです。尚、現場で目撃されていた女子
生徒一人の行方がわからなくなっており、
何らかの事情を知っているものと見て――」

手で髪の毛の乱れを整える透子。
黒いストレートヘアである。

立ち上がり、衣服も整え、ドアを開ける。
と、目の前に少女が一人立っている。
瑞稀である。

瑞稀「……（くるりと背を向ける）」

透子「あ、ちよつと」

無視して歩き出す瑞稀。

透子「ちよつと待って！沙月ちゃん？」

瑞稀「（振り返り、睨みつけ）母親。沙月」
また背を向ける。

透子「あ、ちよ（瑞稀の腕を掴み）、違うの。ほんと違う。断じて違います」
人が通りかかり、じろつと見る。
透子「とりあえず（と瑞稀を中へ引き込む）」

○同・内

瑞稀、玄関横に畳まれた布団を一瞥し、上がり、つかつかと奥の部屋へ。

透子、玄関に立ったまま呼びかける。

透子「昨日たまたま飲み屋さんでお父さんに会って、すごく酔っぱらってたから、タクシーでここまで来て」

瑞稀の声「（奥の部屋から）もういいです」

透子「違うんだって、だから。送り届けたらすぐ帰ろうと思ってたんだけど……（小さく）ああ、変だな。（大きく）とにかく、そういう人じゃないでしょ？お父さん」

瑞稀「（顔を出し、笑い）よく知ってるんだ」
透子「知りませんよ。お父さんには前にちよつとお仕事のこと取材しただけ。（一息つき）どっかにならないかな。出版社から多分その本送られてると思うんだけど」

瑞稀「（乗り出し）『そのボタン』ってやつ？」

透子「……そうだけど」

瑞稀「私持ってます。こないだ来たとき持って帰って……ちよつと、読みました」

透子「あ、そう……ありがとう」

瑞稀「え？」

透子「読んでくれて」

瑞稀「父は多分読んでないですけど」

透子「（苦笑）でも嬉しい。一人でも読んでくれる人がいて」

瑞稀「あの人、仕事のこと話したんですか？」
透子「（笑って首を横に振り）あんまり喋ってもらえなかった。ほとんど私の主観？」

瑞稀「……なんで遠野マスオ？」

透子「あ、そこまで……。梶野透子だから」

瑞稀「なんでマスミとかじゃないんですか」

透子「なんでかね」

瑞稀「でも嫌いじゃないです。私」

透子「（笑い）それはどうも」

突如、バンと開く玄関のドア。

衛が入って来て、透子には目もくれず、

土足でずかずかと瑞稀の元へ。

衛「何してるんだよ、お前は！お母さんから

電話あった。何考えてるんだよ！帰ってち

やんと説明しなさい！ほら！」

と腕を掴み、力づくで瑞稀を引きずる。

玄関前で必死に抵抗する瑞稀。

衛「どういうつもりなんだよ！お前は！」

平手で何度も瑞稀を叩く。

透子、割って入り、

透子「ちよつと」

衛「あなたには関係ない！」

と片手で瑞稀の靴を拾い、透子を押し

け、瑞稀を引っ張って玄関を出て行く。

ドアが閉まり、しんとする部屋。

○佐田家・リビング

カーテンを閉め切った部屋。

室内に刑事二人と沙月がおり、開いたド

ア前に孝一、その後ろに戸越がいる。

涙目の沙月、耳に当てていた携帯を離し、

沙月「（刑事に）やっぱり主人のところ……

今、車でこちらへ向かっているそうで」

○走る車の中

運転席の衛、電話を切り、流れる動作で

携帯を助手席へ投げようとする。

が、瑞稀がいるため、二つの席の間にあ

る台に携帯を置く。

衛「どうしたんだよ、一体。何があった？」

遠くを見ている瑞稀。

衛「黙ってたらわからないだろう！」

瑞稀、何も聞こえていないかのよう。

衛「……お母さんと何かあったのか？」

瑞稀「（衛を見て）違う！お母さんは関係ない」

衛、何も言わず運転を続ける。

○佐田家・リビング

刑事・宮川（51）、うろろしながら、
宮川「（沙月に）もし差し支えなければ、少し
瑞稀さんの部屋を見せていただいても」

と階段の方へ向かう。

沙月「ちよつと待ってください。何かの間違
いです」

戸越「ドアを出たところで戸越が宮川を止め、
ではないですか」

宮川「不服げに引き返す。

ドアの前に立ったまま、一点を見つめて
動かない孝一。

戸越「孝一の肩に手を置き、
戸越「落ち着くまで少し先生の事務所に行っ
てようか」

宮川「ちよつと。弟さんにも聞きたいことが
ありますから、居てもらわないと」

戸越「任意ですよね？」

○走る車の中

ラジオが流れている。無言の瑞稀と衛。

二人の間で携帯が鳴る。『孝一』とある。

衛「（出て）もしもし」

孝一の声「お姉ちゃんいる？」

衛「どうした？話したいのか？」

孝一の声「うん」

衛「瑞稀に携帯を差し出し、

孝一「孝一がお姉ちゃんと話したいって」

受け取り、耳に当てる瑞稀。

○戸越司法書士事務所

小さな司法書士事務所内に、戸越と孝一
が二人きりている。

戸越「孝一から子供用携帯を受け取り、
戸越「もしもし瑞稀ちゃん？戸越です。ちよ
つと落ち着いて聞いてほしいんだけど――」

○走る車の中

何も喋らず携帯を耳に当てている瑞稀。
ちらちらと気にする衛。

戸越の声「わかったね？わかったら返事だけ
してくれるかな？：ね、瑞稀ちゃん。孝
一やお母さん、お父さんのことを考えて」
瑞稀「うん」
電話を切る。

○トンネル前

衛の運転する車がトンネルに入る。

○走る車の中

トンネルの中を走っている。
前方に出口の光が見える。
ラジオから途切れ途切れ音が聞こえ出す。
トンネルを出る。明るくなる車内。
ラジオの音声「|の途中ですが、報道デスク
より今入ったニュースをお伝えします。今
朝○県○市内の中学校の体育館にて、
上から落下してきた重りの直撃を受け重体
となっていた、木島元治さんの中学二年生
の長男・将昌君ですが、先ほど搬送先の病
院にて死亡が確認されたとのことです。繰
り返します」
衛、ラジオを切る。
しばし無言で運転を続ける。
窓の外に溪流が見える。
衛「少し、寄り道してこうか」

○溪流・岸边

水切りをしている衛。

石を持って突っ立っている瑞稀。

衛「ほら、やってみろ。前に教えたる？」

瑞稀「孝一にでしょ」

衛「お姉ちゃんにだよ」

瑞稀、手にしていた石をポトツと落とす。

衛、瑞稀に歩み寄り、

衛「：わざとじゃなかったんだよな？」

瑞稀「よけてくれると思ったんだけど」

瑞稀、衛に背を向け、車の方へ歩き出す。

衛、その背をしばし見つめ、握っていた
石を地面に叩きつける。

○佐田家・前（夕方）

道の端に一台車が止められている。
野次馬が数名。
衛の運転する車が庭に入ってきて来る。
玄関から出て来る刑事ら。追って沙月。
宮川、衛の車の助手席側へ行き、ドアを開け、

宮川「佐田瑞稀ちゃんですね。ちよっと一緒に来てもらっていいかな」

車を降りる瑞稀。そのまま刑事二人に挟まれる形で道路の方へ連れられて行く。

沙月、瑞稀に触れようとするが阻まれる。

道の端に止められた車に乗せられる瑞稀。中学生くらいの野次馬が携帯を向ける。

沙月、車に張り付くようにして、

沙月「お母さん、信じてるから。ね？すぐ帰って来てね。待ってるから。ね？」

車の中の瑞稀、俯き、目を合わせない。

沙月、窓を叩きながら、

沙月「何とか言って！ねえ、お願いよ」

庭の犬が吠え立てる。

運転席の宮川、窓を開け、

宮川「お母さん、お母さん、離れてください。

大丈夫ですから。我々に任せてください」

衛が沙月を車から離れさせる。

○走る車の中（夕方）

後部座席に瑞稀。その隣に若い刑事。

瑞稀、顔を上げ、バックミラーを見る。

立ち尽くす沙月と衛が小さくなっていく。

○木島家・前（夜）

門の前、喪服姿で頭を下げる衛と沙月。

二人の向かいに木島由美子⁴¹がいる。

由美子「泣きじゃくり」帰ってください！お願いですから……帰ってください！

沙月、頭を下げてたまま震えている。

衛、膝をつき、地面に頭をつけ、

衛「（細い声で）本当に申し訳ありません」

木島元治（42）が出て来て、

元治「佐田さん、やめてください。佐田さん」

衛、地面に頭を押し付けたまま、

衛「申し訳ありません、申し訳ありません、

申し訳ありません……（掠れていく）」

元治、衛の前にしやがみ、

元治「……佐田さん。あの子ら小さい時、キ

ャンプに行きましたよね。ミヤマクワガタ

捕まえるんだって、マサと瑞稀ちゃん、二

人で森の奥まで行ってしまつて。私ら一緒

に必死になって探し回りましたよね？」

衛、土下座したまま小刻みに頷く。

元治「（涙ぐみ）お互い、情けないくらい必死

で。だからわかつてるんです。こちらの気

持ちをどれだけわかつてくださってるか。

たまたま……きつと、たまたま今、立場が

別れてしまっただけだ。でも、どうしたつ

て、許せるわけがないんですよ。お願いで

す。二度と姿を見せないください」

元治、立ち上がって由美子の肩を抱き、

門を入っていく。

衛と沙月、頭を下げたままにいる。

○テレビ画面

ニュース番組をやっている。

画面右上に『事件か事故か――〇〇県中学

男子生徒死亡から二日』との見出し。

アナウンサー「――尚、重要参考人として警察

に保護されている同級生の少女は未だ取り

調べには応じず、それ以外の場面でもほと

んど喋ろうとしないとのこと。また、

出された食事にも手を付けず、夜も眠って

いない様子とのこと――」

○透子の部屋

テレビを見ている透子。傍らにボール。

アナウンサーの声――少女の心身への配慮か

ら一時取り調べを中断するなどの措置がと

られていきます。また捜査関係者の話による

と、これらの事情を考慮し、少女の身柄保

護の延長について現在地検と話し合いを――

○鑑別所・外

衛と沙月、マスコミにもみくちやにされながら門を入って行く。

○同・独房

奥の壁に背をつけて座っている瑞稀。

職員がやって来て、

職員「ご両親が面会にいらしてますよ」

瑞稀、首を横に振る。

職員「（歩み寄り）少しだけでも……」

瑞稀、さらに激しく首を横に振る。

○走る車の中

運転席に衛、助手席に沙月。

沙月「どうしていつつも私が悪者にされちゃ

うのよ！」

衛「そんなこと言ってないだろう！」

沙月「お父さん転勤してから私ずっと一人で、
どうしていいかわからないこといっぱいあ
ったけど、私が逃げたら誰もいないから、
ずっと、ずっと一人であの子たちのこと大
事にして……普通に育ててきた。あの子に
対しては丁寧すぎるくらいだった。なのに
なんで……なんでそんな言われ方しなきゃ
いけないの」

衛「悪かったよ、俺が悪かった」

沙月「お父さんいつもそう！全然わかってな
い。何もわかっていないで、いつつもそ
うやって自分ばかり正しいみたいな顔し
て。面倒なことから逃げてばっかだ！」
衛「悪かったって。悪かったからもう黙って
くれ！」

しばし沈黙する二人。走り続ける車。

衛、ウインカーを出す。

沙月「……ちよつと家寄って。シロウに餌あ
げないと」

衛、ウインカーを消す。

○鑑別所・独房

瑞稀、奥の壁に背をつけて座ったまま。職員がやって来て、職員「ご両親、帰られました。……信じてるって。そう伝えてほしいって、お母さん」瑞稀、去ろうとする職員に視線を向け、瑞稀「(掠れた小さな声で)ホン」職員「(振り返り)?」瑞稀「(軽く咳払いし)本って読めますか？」

○川べり

買い物袋を提げて歩く透子。携帯に着信。『○○出版・楠田さん』から。

透子「(出て)はい、榊野です」

楠田の声「お世話になってます。○○の楠田です。先日いただいた原稿、拝読しました」

透子「ありがとうございます」

楠田の声「ただねえ、なんですか、ちょっと独自の世界観が強すぎるというか、なかなかこう、共感も得られなければ、世間の興味を引くのも難しいんじゃないかと」

透子「すいません」

楠田の声「あ、いや、私自身はね、わりと面白く読ませていただいたんですけども。ただ、もう少しほら、どうですかね、例えば少年犯罪モノだとか」

透子「(ぼそりと)モノ」

楠田の声「や、まあ、榊野さんご自身に興味がないのであれば」

透子、立ち止まり、広場の方を見ている。透子「書きます。出す出さないは別として」

○佐田家・外(夕方)

庭には、杭に鎖を巻き付け、身動きが取れなくなっている犬。前の道には野次馬と記者らしき人が数名。庭に衛の車が入って来る。鳴きながら激しく尻尾を振る犬。その尻尾の一部が赤く染まっているのがわかる。車を降り、犬の鎖を解いてやる衛。

餌入れを手に取り、人目を気にしながら家へ入る沙月。中から電話の呼び出し音が聞こえる。

○同・内（夕方）

鳴り続けている電話。やがて留守電のアナウンスに切り替わる。ドッグフードを餌入れに盛る沙月。機械的な動作で何杯も入れ、溢れる。

衛も家の中へ入って来る。

電話の音「発信音の後にお名前とメッセージをどうぞ。ピー：：死ぬ。ツーツー」

衛、電話機に近づく。

留守電履歴241件と表示されている。

再び呼び出し音が鳴る。

衛、電話線を引き抜く。

沙月「あー！」

叫び、餌入れを床に叩きつける。

ドッグフードが飛び散る。

衛、やって来て、餌入れを手に取り、ドッグフードを黙々と拾い集める。

沙月、その様子を涙目で見下ろしながら、

沙月「：：兄さんのところにも変な電話来るよ
うになっちゃったし、なっちゃんも今年受験生だし、あんまり甘えてたら悪いよね」

衛「（見上げ）俺のアパート行こうか。ちよつと狭いかもしれないけど」

沙月「そこだってバレてるでしょ、きつと」
衛「：：」

沙月「戸越さんが、来てもいいよって
くれているの。法律のこととかも詳しいし、安全だと思う」

衛「（立ち上がり）どうしてそうなるんだよ？
他人だろう」

沙月「孝一のためにはその方が：：それこそ
お父さんの仕事なんか知れたらもう」

衛「俺は：：俺はお前らのために、これまで
必死で耐えてきたんじゃないか！どうして
お前に責められない、ただ私は」

沙月「責めてない、ただ私は」

餌入れを振り上げる衛。
ビクつく沙月。

沙月「そっやってすぐ力で黙らせようとする！あの子の暴力的な所はあなたの血ね」

衛、餌入れを床に叩きつけ、

衛「お前だって手上げてただろ！躰の範疇じゃないか」

沙月「自分の妻も躰けるんだ。そうね、出来の悪い妻、出来の悪い母でした」

衛「（溜息をつき）またそういう……」

沙月「ごめんなさい。今は他人といた方が楽。……私のため」

○佐田家・外（夕方）

犬、自分の尻尾を追って、同じ所をくると回っている。

○透子の部屋（夜）

透子、机の奥のボールを取る。

赤いシミを確認し、それを服の上から腿に擦り付け拭おうとする。

再度確認する。赤いシミはそのまま。

○鑑別所・独房（夜）

壁に背をつけて座り、本を読む瑞稀。

表紙には『確信犯 遠野マスオ』とある。ページをめくる。

所々黒く塗り潰されている。

○オフィスビル・外

オフィスビルに入って行く透子。

エントランスに入居テナント名の入ったプレートが掲げられている。うち3、4階を『株式会社○○出版』が占めている。

○出版社・内

電話応対中の従業員・本倉（26）。

本倉「……いや、ちよつと私では判断しかねますので、少々お待ちいただけますか」

保留にして、隣の席の川井（28）に、

本倉「なんか警察からで、例の重り落下事件の女の子が遠野マスオに会いたがつてるんで取り次いでもらえないかって」
川井「うわマジ？これアレな展開じゃね？」
根津「遠野さんなら来てるよ。さっき楠田さんと応接室入ってたでしょ」
川井「え、あれそうなんすか？」

○同・応接室

応接テーブルを挟んで窓側に透子、ドア側に楠田樹(45)が座っている。
ドアがノックされる。

楠田「(振り返り)はい」

本倉の声「失礼します」

ドアを開ける本倉。

楠田「どうした？」

手持無沙汰にお茶を口に運ぶ透子。

本倉「(楠田に)あ、いや……(透子に)遠野さん？」
透子、顔を上げ、お茶を置く。

○透子の部屋・洗面所(夜)

鏡に映る透子の顔。水の音。
下を向いて何かを懸命に洗っている様子。
薄っすらピンクがかかった泡が鏡に付く。

×
タオルで球体を拭く透子。
×
不自然に白くなつたボールが出てくる。

○佐田家・孝一の部屋(夜)

沙月、孝一の服をボストンバッグにてきぱきと詰めている。

孝一「それの後ろで見ながら、

孝一「お姉ちゃんずっと黙ってるの？」

沙月「うーん、そうみたいね」

孝一「多分、先生に言われたから」

沙月、手を止め、振り返る。

○衛のアパート・外(夜)

駐車場に車を止め、降りる衛。
物陰からナンバープレートを確認する男。
週刊誌記者・師岡（41）である。
師岡、部屋の鍵を取り出し歩く衛に、
師岡「あ、すいません、ちよっとよろしいで
すか？佐田さん、ですよ？少しお話を伺
いたいんですが」

衛、無視して部屋の鍵を開け、中へ入る。

○戸越家・ダイニング（夜）

出前と思しき料理が並ぶ食卓。

無言で箸を進める沙月。

その隣に行儀よく座ったままの孝一。

向かいで二人の様子を気にする戸越。

沙月「孝一、いただきなさい。先生せつかく
用意してくださったんだから」

戸越「（沙月に）いや、何もそういうことは。

大したものじゃないですし。（孝一に）でも

ほら、少し食わないと。野球だって上手く

なれないぞ」

孝一「ごちそうさまです」

席を立ち、出て行く。ドアが閉まる。

沙月「戸越さん、あの子に聞いたんですけど、
あの日瑞稀に――」

○同・和室（夜）

障子越しの月明かりに照らされる室内。

一角にポストンバッグが二つ。

その横に膝を抱えて座っている孝一。

沙月と戸越の会話が聞こえる。

沙月の声「私は、もしあの子がわざとやった

のなら、ちゃんと償わせてやりたいんです」

戸越の声「佐田さんはわかってないんですよ。

それが周りの人間にとってもどれだけ大変

なことか」

沙月の声「戸越さんこそわかってないです！

親は自分の子供のためなら、どんなことだ

って」

戸越の声「あなたの子供は瑞稀ちゃんだけじ

やないでしょう！」

小さく丸まり震える孝一。

○衛の部屋・台所（夜）

真つ暗な室内にぼつりとタバコの火。回る換気扇から射す月明かりが断続的に無表情な衛の半面を照らす。

○同・外（夜）

ボールを持った透子がやって来る。ドアの前に立ち、躊躇う。回る換気扇の音。それを見上げる透子。その瞬間、フラッシュが焚かれる。辺りを見回し、立ち去る透子。

○鑑別所・面会室

窓のある明るい部屋。テーブルを挟んで向かい合わせに座っている透子と瑞稀。

瑞稀の背後、入り口付近に職員が一人。透子の斜め後ろ、部屋の隅辺りに簡易机と椅子が置かれ、初老の女が座っている。女はノートとペンを並べた机に肘をつき、両手を組んでそこに顎を据え、じっと瑞稀の様子を窺っている。

瑞稀「……父、元気ですか？」

透子「会ってないよ。私、関係ない人間ですから。ほんと、誤解だからね？」

瑞稀「どうでもいいです、そんなこと」

透子「どうでもよくないでしょ」

瑞稀「（遮り）読みました、また。梶野さんが書いた本」

透子「……」

瑞稀「3ページ分くらい塗り潰されてたけど、大体わかつちやった」

透子「そう」

瑞稀「私、好きですよ。ああいうの」

透子「……どうもありがとう」

瑞稀「……迷惑ですか？私みたいなのに読まれると」

透子「（首を横に振り）んーん。嬉しい、本当

に。ごめんね。あんまりこう、面と向かって言われる機会ってないから、どういう顔すればいいのか」

瑞稀「身近な人とかに読んでもらったりはしないんですか？」

透子「（笑い）心配かけちゃうからね」

瑞稀「なんか定型文みたい、その顔ごと」

透子「（笑うのをやめ）そうね。近い人間ほど、知らない方がいいことって多いと思うし。こっちはこっちで、そういう人に知られると思うと、もう何も書けなくなっちゃうし。そういうものだから」

聞いている間、じっと見つめていた瑞稀。

すつと透子の髪に手を伸ばし、触れる。

瑞稀「綺麗な髪。強い人」

固まる透子。

○同・廊下

並んで歩く職員と透子。

職員「精神鑑定の足しにでもなればと思って
お呼びしたんですがね。あれじゃあなたの
鑑定ですよ」

透子「申し訳ありません。お役に立てず」

○衛の部屋・前（夕方）

買い物袋を提げた透子、呼び鈴を鳴らす。

透子「柵野です」

換気扇を見上げる。回っていない。

袋をドアノブに掛け、去ろうとする。

ドアが開く。無精髭を蓄えた衛が出る。

衛「何ですか」

透子、ドアノブに掛けた袋を取る。

その瞬間、フラッシュの光が。

連続してシャッターが切られる。

衛、そのフラッシュを遮るようにドアを

大きく開け、

衛「上がってください」

○同・内（夕方）

カーテンの閉め切られた薄暗い部屋。

煙が充満している。
流しに大量のタバコの吸い殻。

軽く咳込む透子。

衛、換気扇を回す。

透子、玄関に立ったまま、買い物袋から
ボールを取り出し、

透子「これ」

衛「今そんなもの……。捨ててくださいって
言ったじゃないですか」

透子「だけど」

衛「捨てることなさいよ。わかるでしょう？も
う使うことなんてないんです」

透子「透子、目を逸らし、ボールを袋に戻す。

衛「それだけですか？」

透子「いえ……。娘さんのことなんですけど」
衛「関係ないでしょう！あなたには。また取
材ですか」

透子「違うんです、娘さん」
衛「衛、拳を横に振り、壁に叩きつけ、

透子「よしてくれって！頼むから！」

衛「透子……」
透子「透子……」

衛「透子……」
透子「透子……」

衛「透子……」
透子「透子……」

衛「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

透子「透子……」
透子「透子……」

○道（夕方）

師岡「速足で歩く透子の後を師岡がついて来る。
ね？少しでいいので、お話伺えないです

か？個人情報は一切出しません。お約束しますから。ねえ、ちよっと」

透子「（見向き）私、あの方とは一切関係ありません。同業みたいなものです、あなた方よりずっとタチの悪い」

○オフィスビル・内

エレベーターに乗り込む透子。

離れた所で見ている師岡。

階数表示は3で停まり、再び降りて来る。

エレベーターから出て来る川井。

イヤホンを耳にはめながら歩く。

師岡、小走りで駆け寄り、

師岡「あ、お忙しいところ恐縮です。今入って行かれたのって、お宅の社員さん？」

川井「（イヤホンを外し）？」

師岡「ほら、黒髪ストレートの」

川井「ああ」

○橋の上

欄干に手を添え、広場を眺める透子。

アマガエルが鳴いている。

携帯が鳴る。番号で表示される。

透子「（少し考え、出て）はい」

衛の声「突然すみません。佐田です。以前いただいた名刺にこの番号があったので。会社の電話でしたか？」

透子「ああ、いえ。勤め人ではないので」

衛の声「それでしたか。この間のことなんですけど、申し訳なかったなと思って」

透子「いえ、私の方こそ。自分でも時々、無神経が過ぎるんじゃないかって思いますし」

○戸越家・リビング

週刊誌を見る沙月。目の下にはクマ。

誌面には『「重り落下事件」だんまりを決め込む少女、複雑な家庭環境が浮き彫りに』『父親は刑務官、周囲からの評価は一貫して「真面目」。しかし重い守秘義務を負う身でありながら、女流作家・遠

野マスオの取材に応じ、以後不倫関係に』
『遠野の著書を少女も読み、なんらかの
影響を受けていた可能性が』などとある。
さらに、衛の部屋の前に立つ透子の顔、
部屋へ入って行く姿が収められた写真も。
戸越「真に受けるもんじゃありませんよ」

○衛の部屋

カーテンを閉め切った部屋で、テレビ台
の棚などを漁りながら電話している衛。
衛「俺、読んだんですよ、あの本。正直、な
んて感想を言えればいいのかわからなくて、
そのままにしてみました。読んでですけど」
透子の声「ありがたいです。読んでいただけ
ただけで。気を悪くされましたよね？」
衛「いや……色んな考え方があると思います」
透子の声「(笑い)いいですよ。そんな無理し
てくださらなくて」
衛「いや、そうじゃなくて。決して共感でき
たわけではないんですが、わからないでも
なかった」

○戸越家・リビング

泣いている沙月。後ろで見ている孝一。
戸越「(孝一に)先生と公園でも行ってキャッ
チボールするか！(沙月の背中に手を添え)
お母さんも。たまには外の空気吸わないと」
孝一「雨だよ。外」

○橋の上

透子の視線の先には、キャッチボールを
する父子の姿がある。
衛の声「前回の執行の時は、ニュースを見て
察して妻が飛んで来てくれたんです。お父
さんは休んでたって、身の回りのこと全部
やってくれて。腫れ物に触るみたい。そ
れで晩酌して泣くんですよ。辛かったです
よう、私にはわかるからって。参った。も
う随分前からそういう感覚が麻痺していて、

それはきっと防衛的なものだと考えていたんですが、時折、さすがに何か感じなきやいけないだろうって、正しい感情を取り出そうとするんですけど、どういうわけか、どこにも見当たらないんです。なのに目の前で、罪もない女がボロボロ涙を流してる。責められてる気がしてならなかった」

透子「ああ：：初めて話してくれましたね。もう使い道ないですけど」

衛の声「合理主義ですね。あなたと話してるのと、なんとというか、楽だ。自分を嫌いにならなくて済む」

透子「（笑い）酷い言いよう」

衛の声「（少し笑い）申し訳ない。でも本当にいくらか救われる節があった。ありがとう」

透子「：：こちらこそ、ありがとうございます」

す。あの、佐田さん、」

衛の声「あ、すいません。キヤツチかな。緊急のことだとあれなので、また」

透子「あ、ちよっと」

電話を切り、空を見る。何もない灰色。

○戸越家・リビング

戸越「取り乱す沙月から携帯を奪う。戸越「落ち着きましたよう。孝一の前です」

電話が鳴る。電源を落とす戸越。

○鑑別所・面会室

テーブルに透子と瑞稀。瑞稀の後ろに職員、透子の後ろに初老の女。

瑞稀「（目を輝かせ）また読みました。3冊。やっぱ好き。あの、ゴキブリとカナブンの触角の話とか、わかるって思ってた」

透子「（笑い）ありがとう」

瑞稀「また何か書いてないんですか？」

透子「書いてるけど：：お蔵入りかな」

瑞稀「どうして」

透子「ちよっとね、あんまりよくない」

瑞稀「じゃあ私にだけ読ませてください」

透子「：：」

瑞稀「ダメですか？」
透子「……ねえ聞いてくれる？」

○走る車の中

戸越の運転する車。助手席に沙月。下校途中の小学生が見える。男女一緒になつて缶蹴りなどしてはしゃいでいる。透子の声が重なる。

透子の声「子供頃、通学路に低い声でよく吠える犬がいたんだけど。小屋に猛犬つてシールがいっぱい貼ってあって、近づくと皆噛まれちゃうんだ。ちよっかい出そうとした子も、頭を撫でようとした子も、皆。私も近づいた。初めは目の前にしゃがんで、じつと目を見るだけ。唸られた。だんだん距離を詰めて、牙の前に手を差し出した。やっぱり噛まれた。でも血が出るほどではなくて。それを繰り返すうちに手を舐めてくるようになって、私だけがその犬を撫でられるようになった――」

○鑑別所・面会室

瑞稀「話す透子をじつと見ている。透子――目立たない子だった私を、皆が特別な目で見たわ。どう思う？」
瑞稀「……」
透子「私、その犬の名前も知らない。そういう人間――」

○同・外

停まっている戸越の車。
戸越「僕も行って交渉してみましようか？」
沙月「一人で行かせてください」
ドアを開け、外へ出る。

○同・面会室

職員に誘導されて出口へ向かう瑞稀。テーブルについたままの透子。
瑞稀「ドア前で立ち止まり、体ごと透子の方へ振り返り、

瑞稀「瑞稀です。私は、佐田瑞稀です。また来てください。待っています。ずっと」
見つめる透子。

○同・廊下

並んで歩く職員と透子。
職員「本当にこちらの意向を汲んでいただけ
ないんですね。どこかい病院でも紹介し
ましようか？」
透子「ご親切にどうも」

○同・受付

窓口職員「お電話でもお伝えした通り、親御
さんにはまだ会いたくないようでした」
沙月「私の子なんです。どうして私の希望で
会えないんですか？」

そこへ透子が歩いて来て、台に置かれた
紙に退出時刻を書き込む。
髪を耳にかける透子。横顔を見る沙月。

○同・外

透子「沙月に腕を掴まれている透子。」

沙月「主人はいい。でもなんで娘まで盗られ
なきゃいけないのよ！どうして私には会
たくなくて、あなたには会えるの？」

透子「離してください」

沙月「(両腕を掴み)ねえ教えて、私の何が
けなかった？愛情がそんなに足りてなかつ
た？十分注いできたつもりよ？それでも伝
わらなかつた？ねえ、なんで？他人のあな
たには与えられないものがあるの？あの子
それを喜んで受け取るの？お願い、もう何
でもいいから教えてくださいよ」

透子「涙をいっばいに溜めた目で透子を見る。
透子、その目をしばし見た後、

透子「彼女は服従の対象を求めていきます」
開かれたままの沙月の両目からポロポロ
と涙がこぼれ出す。

透子「：：例えばの話ですが、チワワからオオカミが生まれてしまったとして、なんであんたはチワワなんだって、親を憎んで気の済むオオカミなんていませんよね」

沙月「バカにしてるの？私のこと！あの子そっくり、あなた」

透子「そちらが聞くから話してるんです。本気で受け入れる覚悟があるなら、ちゃんと聞いてください」

沙月、真っ赤な目で透子を睨む。

透子「彼女の怒りの矛先はいつだって、自分で自分はオオカミなんだって、そこへ向かっていきます。あなたにはどうしようもないことです」

戸越がやって来て、沙月の肩を抱き、

戸越「行きましょう」

沙月「（戸越の腕を払いのけ）だったら私は、あの子に食い殺されたって構わない！どう思われていようと、あの子の母親は私なの！私しかいないんだから！」

どこからかカメラのシャッター音。

○コンビニ・外

窓面に並ぶ週刊誌に『重り落下事件少女、複雑な家庭環境』などといった見出しが、無精髭の濃くなつた衛が店内へ入る。週刊誌コーナー横を素通り。

○衛の部屋・台所

誰もいない薄暗い部屋。

玄関のドアが開く。

衛がコンビニの袋を提げて入って来る。

すぐに鍵をかけ、上がる。

流し台の上に袋を置き、中から1カートンのタバコを取り出す。

袋にはもう数カートン入っている。

× × ×

換気扇の下でタバコを吸っている衛。

流し台の上にはすでに1箱握り潰された状態で置かれている。

奥の部屋で携帯が鳴る。
タバコの火を消す衛。

○同・居間

カーテンの閉め切られた部屋。
電話に出る衛。

衛「何考えてるんだよ！ずっと繋がらなくて俺がどれだけ心配したか！」

沙月の声「（微かに笑い）心配。全部バレちゃったね。お父さんの仕事のこと、私が知らなかったことも、全部」

衛「何の話だよ」

沙月の声「見てないの、週刊誌。カーテン閉め切つてずっと部屋にこもってるんでしょ。

そうやって、面倒なことは見ようとしな。あなたの問題、あなたと、私たちの問題なのに。苦しむのはいつも私だけ」

衛「何が言いたいんだ、説明しろよ！」

沙月の声「こつちが聞きたいわよ！」

衛「（溜息をつき）どうしていつもそう冷静に話せない」

沙月の声「もういい。いいからもう別れて」
衛「どうしてそうなるんだよ。子供たちのこと考えろって」

沙月の声「考えるから言ってるの！孝一のこと：：もう受験どころじゃないけど、せめて名前変えて別の地域の学校へ行かせて、

人目を気にせずにごさせてやりたい」
衛「戸越とでも名乗らせるのかよ」

沙月の声「私の旧姓に決まってるでしょ！あなたと一緒にしないで！」

衛「とにかく、何か誤解してるんだろ、家族ってそんな単純なものじゃないだろう。時間かけて落ち着いて考えよう。な？」

沙月の声「（鼻で笑い）家族：：また新しく作り直せばいいじゃない。もう勝手にしてよ。疲れた。（泣きながら）あの子だって、その

衛「は？」

○透子の部屋

携帯が鳴る。『佐田さん』と表示される。

○衛の部屋・居間

衛と透子、テーブルを挟み、座っている。

衛「どういうことですか。面会行ってるって」

透子「何度も言おうとしました」

衛「聞いてない」

透子「佐田さんが聞こうとしないから」

衛「あんたまでそれか。もう勘弁してくれよ」

透子の携帯が鳴る。『母』とある。放置し、

透子「娘さん、何もお母さんやお父さんのこ

と嫌ってるわけじゃなくて、ただどうい

顔して会えばいいのかわからないんだと思

います」

一度切れ、すぐにまた鳴る携帯。

衛「どうして他人のあんたから自分の娘のこ

と聞かされなきゃなんないんだよ！」

透子「他人だから見せられる顔ってあるじゃ

ないですか」

衛、頭を掻きむしり、その腕をテーブル

に向かつて思い切り振り下ろす。

鳴り続けている電話。

衛「……出たらどうですか」

透子「……すいません」

電話に出つつ立ち上がる。

透子「もしもし、何かあった？」

彩乃の声「何かあったってこっちが聞きたい

よ。さつき週刊誌の記者だって人が来て――」

○同・台所

携帯を耳に当て、居間から出て来る透子。

透子「何か喋った？」

彩乃の声「喋んないよ。第一お母さん何にも

喋ることない。その記者の人の方がよっぽ

どあなたのことわかってるみたいだった」

透子「……」

彩乃の声「どうしてわざわざそんなことに首

突っ込んでるのよ。まるであんたが人殺し

みたいな言われようで……不倫までしてる

って：：私、もう恥ずかしくって」

透子「ごめんなさい」

彩乃の声「ごめんなさいって：：お母さんたち、ただあんたに普通に生きてほしいって、もうそれしか望んでないのよ？なんでそんなに困らせたいのよ」

父の声「（遠くから）よしなさいって、もう。

（電話口で）もしもし、父さんだけでも。

お前もいい加減大人なんだから口出しするつもりはないけど、自分のことは大事にしなさいよ。本当にそれだけはな」

透子「うん。ごめんね、ありがとう」

父の声「それじゃあ：：」

透子「あ、ちよつと、もう一回お母さんに替

わってもらってもいい？」

彩乃の声「もしもし、悪かったね、言い過ぎ

た。お母さん、ただあなたが心配で」

透子「うん。こっちこそ、本当にごめんね。

体だけ大事にしてね」

彩乃の声「あんたも。辛くなったらいつでも帰って来んのよ？何があっても待ってるからね」

透子「うん、落ち着いたら帰る。ありがとう」

彩乃の声「あ、それから：：記者の人が、あなたのだって言って本置いてったんだけど：：何？名前変えて書いてるの？」

透子「：：」

彩乃の声「透子？」

透子「：：読まずに捨てて。お願い」
電話を切る。

○同・居間

戻って来る透子。衛、座ったまま。
衛「申し訳ない。今日はもう帰ってください。

透子「でも、このままじゃあの子」

衛「言われなくてもわかってますよ！」

透子「嘘。絶対わかかってない」

衛「もうそういうのうんざりなんだって！頼むよ、出てってくれ。保てない」

透子「……：そうやって一生知らなければいい。それが最善。それがあの子のためにあなた方にできる唯一のことです」

衛「立ち上がり、透子を突き飛ばし、
衛「そうかそうかそうか！だがわかんないだ
ろうな、あんたなんか親の気持ちなんて」
壁に頭を打ち付けた透子、よろけながら
も強い視線を返す。

衛「……もうほっといてくれませんか。結局、
面白がってるだけだろう」

透子「……：（笑い）そうです。面白い。とて
も興味深い。私にはわからないことだから」
手を上げる衛。

○同・台所

居間から響く平手打ちの音。

透子の笑い声。

衛の声「一生そうやって人見下して、一人で
生きてくんだろうな、あんたは！」

透子の笑い声、止む。
回る換気扇。風の音。

○同・居間（夕方）

覆い被さる衛の体の下から這い出す透子。

○同・台所（夕方）

居間から出て来る透子。

呆然と歩いて来て、流し台の上のタバコ
とライターを手取る。

一本取り出し、ライターで火を点けよう
とするが、手が震えて上手く扱えない。

壁に向かってライターを投げつける。
コンロの火を点け、タバコに着火。

啞え、コンロを消し、しゃがみ込む。
居間から衛が出て来る。

衛「……：すいません」

透子「少しはお役に立てました？」

言った直後、涙が落ちる。

衛「……：申し訳なかったです」

透子「勘違いしないで。あなたがもたらした

苦しみじゃないわ、あなたに拭えなかった
苦しみよ」

衛「……」

透子「（笑い）そんな義理ないですよね、あなたにも誰にも」

衛「……」

立ち尽くす衛の顔に、換気扇から射す西日と回り続ける羽根の影が重なる。

透子「……そんな目で見ないですよ！」

○ 出版社

引っ切り無しに電話が鳴っている。

○ 同・応接室

テーブルを挟んで楠田と透子。

楠田「ご覧になつてるかと思ひますが」

週刊誌に目を落とす透子。

その透子の口元の腫れが気になる楠田。

誌面には『題材探しのための独占取材!？

重り落下事件の少女と女流作家・遠野マ

スオ、面会していた！少年法に守られた

塀の中、或いはあらゆる倫理の外側で、

少女はなぜ親にも見せない素顔を――』な

どといった記事に加え、取り乱す沙月と

それを突き放す透子の写真が。

楠田「私生活について、とやかく言うつもり

はないですけど、ちよつとイメージがよく

ないですよ。おかげで今あなたの本伸び

てるわけですし、感謝すべきなのかもしれ

ませんが、はつきり言つて不本意だ。ご自

身だつてそうでしょう？」

透子「……申し訳ございません」

頭を下げる。

○ 鑑別所・面会室

俯き加減の透子。

向かいに座つてじつと見つめている瑞稀。

瑞稀「どうして目合わせてくれないんですか」

おずおずと顔を上げる透子。

瑞稀、透子の口元の腫れを見て、

瑞稀「……お父さん？」

透子「（目を逸らし）そんな人じゃないでしょ」
瑞稀「時々、歯止めがきかなくなることもあるから……ごめんなさい」

透子「（みっともない笑みを浮かべ）どうしてあなたが？私が悪かったの」

瑞稀「なんでそんなふうに笑うの」

透子「（笑みを浮かべたまま少し涙ぐみ）ごめんね。私、あなたの神様にはなれない」

瑞稀の目から光が消える。

沈黙する二人。

忙しなくペンを走らせる音が響く。

部屋の角の初老の女に視線を向ける瑞稀。
がばつと立ち上がり、

瑞稀「違う！関係ない！誰も関係ない！」

職員、駆け寄り、瑞稀を抑えようとする。

瑞稀、その手を振り払い、

瑞稀「普通の家で、普通に育ててもらいました。人間なんだから、怒ったり泣いたりするのは当たり前じゃないですか！どこの家だつて多分一緒……」

初老の女、冷静にメモを取り続けている。

瑞稀「あなただつて自分の子供にそうしたことがあるでしょう？ただ人として生きてることに何の罪もない。悪いのは私です。誰のせいでもない。私だけがおかしいの！」

職員「落ち着こう、ね？落ち着こう。大丈夫。

大丈夫だから」

と瑞稀の背中をさすり、出口へ誘導する。

透子、ただ呆然と瑞稀を見ている。

瑞稀、力なく歩き、透子に見向きもせず、部屋を出て行く。

初老の女、机の上を片付け、部屋を出る。

明るい室内に一人取り残された透子。

その頬を静かに涙が伝う。

○同（日替わり）

透子が座っていた位置に沙月、その隣に戸越がいる。

沙月の向かいに瑞稀。俯いている。
沙月「ありがとね。会ってくれて、お母さん嬉しい」

戸惑いながら顔を上げる瑞稀。

沙月「ほとんど食べてないんだって？ 痩せちやって……」

瑞稀、沙月を見る。やつれた顔、伸びたパーマ、パサついた毛先、プリン状態の脳天には所々白髪も混じっている。

瑞稀「……お母さんも」

沙月「ん？（無理に笑い）そんなことないよ」

瑞稀「……お父さんは？」

沙月「お父さんには言っていないの。ちよつと

今お母さん、お父さんとは会いたくなくて」

瑞稀「ごめんなさい」

沙月「どうして？ お姉ちゃんのせいじゃないよ？ お父さんとお母さんの問題」

瑞稀「孝一は？ 怒ってるよね」

沙月「（首を横に振り）待ってるよ、孝一だつて、お姉ちゃんのこと」

瑞稀「……」

戸越「瑞稀ちゃん」

瑞稀「……」

戸越「瑞稀ちゃん」

瑞稀、戸越を見る。

戸越「そろそろちゃんと話したらどうだろう」

沙月も戸越を見る。

戸越「ショックだったんだとは思うけど、君

がいつまでも話さないと、お母さんもお父

さんも孝一も、こうやってずっと」

沙月「（割って入り）いいの、気にしなくて。

あなたがちゃんと、ちゃんと本当のことを

話せるようになるまで、お母さん待ってる

から。（震えながら）どんなことがあっても、

私だけは絶対あなたを見捨てない」

ポロポロと涙が落ちる。

戸越、横からハンカチを差し出す。

瑞稀、遠い目で二人を見ている。

○ 衛の部屋

玄関前に立ち、携帯を耳に当てている衛。
プープープーという音。

一度切り、再び発信。『沙月』
プープーという音。
隣室からテレビの音声が漏れ聞こえる。
テレビの音声「重り落下事件の少女、ついに
供述、家庭での保護観察処分が決定――」
立ち尽くす衛の左手には、沙月からの郵便物が握られている。

○透子の部屋

透子 テレビを見ている透子。
アナウンサーの声「少女は、驚かそうとした
だけだったが、体育館に侵入した鳥に気を
取られ、手を離してしまった。思いがけず
大変な事になった。しかも、ショックで何
も話せなかった」と供述。これは事件当日
の目撃証言とも重なるものであること、さ
らに「今後は家庭環境を十分に整え少女の
健全な養育に努めていきたい」との家族及
びその関係者からの強い要望も聞かれたこ
とから、十分に協議した上でこのような処
分の決定に至ったとのこと――
透子 テレビを消し、携帯を取る透子。
発信するも、プープーという音。

○衛の部屋・前

透子 やって来る透子。
チャイムを鳴らす。応答なし。
透子 「すいません、柵野です」
換気扇を見上げる。
煤混じりの煙が噴き出している。
透子 「ドアを強めにノックしながら、
夫ですか？ 佐田さん、柵野です。大丈夫
ですか？ 佐田さん！」
衛 「ドアが開く。ぬつと出て来る衛。
透子 「何ですか」

透子 「流しから炎が上がっているのが見える。」

○同・内

慌てて玄関内へ踏み入り、流しの蛇口を

ひねる透子。

他人事のように見ている衛。

流しに残る水浸しの離婚届。

透子「……ごめんなさい」

衛「あなたには関係のないことです」

透子「……娘さん、帰ったって」

衛「そうみたいです」

透子「変ですよね。……私、最後に会った時、

失望させるようなこと言ってしまった」

衛「関係ないですよ、あなたは」

透子「……」

流しの角に置かれた封筒に気づく。

透子「すいません」

封筒を取る。

裏面に『○○県○○市——』との住所。

衛「そこはもう誰の家でもありませんよ」

透子「すいません」

と玄関を出て行く。

取り残され、立ち尽くす衛。

○佐田家・外

犬小屋を見つめる瑞稀。周囲に雑草。

玄関の鍵を開けようとしている沙月。

瑞稀「シロウは？」

沙月「(背を向けたまま)うん。戸越さんに余

計な負担かけたら悪いから」

とドアを開け、振り向き、道路にいる野

次馬や記者らを一瞥して、

沙月「(瑞稀に)ほら、早く」

人々の目から逃れるように中へ入る沙月。

瑞稀、一度見物人らを振り返った後、玄

関へと向かう。

○同・瑞稀の部屋

ドアを開ける瑞稀。

机の上に、文房具、リコーダー、彫刻刀

などが整然と並べられている。

その中に、遠野の本、蓋が底に重ねられ

中身を晒されたクッキーの缶もある。

立ち止まり、それらを見つめる瑞稀。

沙月、背後から、
沙月「警察の人が念のためって言うから……
何にもないのにね。ごめんね」

瑞稀「いい。別に」
沙月「お母さんの手紙、全部とっといてくれてたんだね」

瑞稀「(沙月を見ずに)……捨て方がわかんなかったから」

沙月「そっか。(無理に笑い)ケーキあるの。誕生日、一緒に居られなかったから、二人でお祝いしよ。孝一には内緒ね。早く準備して下おいで」

瑞稀「(尚も振り向かず)うん」

ポストンバッグに服を詰め始める。

沙月、一度去ろうとするが、留まり、
沙月「(瑞稀の背に)どうして本当のこと言わなかったの」

瑞稀「(手を止め、微かに笑い)信じてるって言ってたのに」

沙月「……何がおかしいの？なんでそこで笑えるのよ」

瑞稀、振り向き、赤い目で睨みつける。
沙月「……ごめん。そうだね。信じてる。お母さんだけは信じなきゃね」
と出て行く。

瑞稀、服を詰めるのをやめ、机へ向かう。クツキーの缶からメモ書きの束を取り出す。全て沙月の筆跡で『ごめんね』『ずつと』『仲良く』『大事』等の文字が並ぶ。無表情でそれらを見つめる瑞稀。その頬に涙が伝っている。

○同・1階廊下→階段

沙月、ダイニングから出て来て、廊下を歩きながら、

沙月「お姉ちゃん？(階段を見上げ)コーヒー冷め」

階段の途中に立ち、柵の隙間から拳を作った右腕を真っ直ぐ突き出している瑞稀。

沙月「……どうしたの？」

瑞稀「（目を瞑り）イメージしてたの。すごくリアルに。この手を離せばどうなるか、一番最悪な結果を、細かく、リアルに。頭の中で全部見て、鳥肌立って、テンション上がって：：壊そうと思えば、いつでも自分の手で壊せる。だから、今そうしなくても大丈夫、って。（目を開ける）」

沙月「：：（目を泳がせ、頬を痙攣させ）早く下りて来て？ ケーキ切ったから」

瑞稀「本当のこと：：聞いて」

沙月「よそう？ もう終わったんだから」

瑞稀「天井の方を見て、何かを追うように目を動かし、

瑞稀「透明だからわかんないのかな。そこに窓があるのに、バカみたいに何度も何度もぶつかって、バカみたいに弱ってく：：ほとんど、バカみたいって思っちゃって」

と沙月を見下ろし、握っていた拳をパツと開く。

沙月「：：（呆然と見上げたまま）」

瑞稀「腕を下ろし、階段下り始める。

瑞稀「想像してたより、なんか全然あつけない気がした」

階段を下りきり、沙月の横を通り抜け、

瑞稀「死んだって聞いても、そういうこともあるんだなって感じでもよくわからなかった」

○同・ダイニング

入って来る瑞稀。後から沙月。

テーブルの上に、ケーキとコーヒーが二人分用意されている。

瑞稀、少し大きめにカットされたケーキの前に座り、

瑞稀「今も自分のことじゃないみたい」

ケーキの上の『HAPPY BIRTHDAY』

と記されたプレートを見つめ、

瑞稀「私、居るのが居ないのかわかんないのに、私のせいで皆が困ってる」

立ち尽くす沙月を見て、
瑞稀「お母さん、私、なんで生まれてきちゃったのかな」

沙月「……お母さんが生んだからだよ。私が、生んだから」

流し台へ移動し、水切りカゴから水滴の付いた包丁を取り出して、

沙月「ごめんね。あんたは何も悪くない。全部お母さんのせい。……お母さん、もうあんただけのお母さんになるから、一緒に死んじゃおう。したら全部終わるから」

瑞稀、肩上の髪を手で小さくまとめ、沙月に首を見せるようにしてじっと待つ。

沙月、震える手で包丁を握りしめたまま動かない。

瑞稀、がばっと立ち上がり、
瑞稀「早くしてよ！」

と沙月に迫って行き、包丁の刃先に立ち、
瑞稀「早く」

沙月「……（目に涙を溜めている）」
瑞稀「口だけ。口だけだ」

沙月「なんでそんなふうに言うの……（泣きじゃくり）あんたのために何もかも犠牲に

してきたのに、どうしてわからないの」
瑞稀、光のない目でじっと見ている。

沙月「私、あんたのこと、時々憎くて憎くてたまらなかつた。その目で見られるたびに、

気が狂いそうだった。それでも、あなたが大事で大事でしようがなかつたのよ」

瑞稀「知ってる。どっちも知ってる」
沙月、包丁を持ち変え、瑞稀に柄を向け、

沙月「本当は私を殺したかったんだよね。あなたに殺されるなら、お母さん本望」

瑞稀「……柄を握り、刃を見つめる。
瑞稀「……私はずっと、あなたのこと真っ直ぐ憎めたらどれだけ楽だろうって思ってた。

与えられれば与えられるほど、自分の醜さに押し潰されていく一方だった」

瑞稀「生まれ来てきてごめんなさい」

瑞稀にもたれかかる沙月。

沙月「（肩で息をし）ごめんね……瑞稀」
瑞稀「……お母さん？」

沙月、瑞稀の両肩をがしっと掴み、震えながらも体を立て直し、

沙月「（瑞稀の目を真っ直ぐ見て）瑞稀。私は、私だけは、あなたの全部を許します」

再び瑞稀にもたれ、

沙月「生きて」

二人の体の間、瑞稀の腕を伝う沙月の血。

○佐田家前の道

近隣住民と思しき野次馬は疎らになり、記者らはカーテンの閉め切られた家の中を窺うような素振りなどしている。

少し離れた所に一台のタクシーが停まる。出て来た透子、人々の間を抜け、佐田家の敷地内へ。

記者 A 「え？ あら？ あなたあの、ちよつと」

記者 B 「（見送りつつ）すごいな、あの神経」

○佐田家・外

玄関前までやって来た透子。

チャイムの位置を確認し、躊躇っている。風が吹く。髪が揺れる。

透子、ふと犬小屋の方を振り返る。

錆びた杭の横、首の折れたタンポポから

綿毛が舞う。

ドアノブを握る透子の手。

○同・ダイニング

沙月の体の下敷きになり、天井へ向かって右手を伸ばしている瑞稀。

肘の辺りまで真っ赤である。

瑞稀、親指と人差し指を擦り合わせる。

指の先から乾いた血がポロポロと落ち、

素肌が現れる。

玄関のドアがゆっくりと開く音がする。

○同・廊下くダイニング

そろそろと廊下を歩いて来る透子。
沙月の下敷きになったまま、足音の方へ
目を動かす瑞稀。
ダイニングの入り口で立ち止まる透子。
床から視線だけを透子へ向ける瑞稀。
透子「……怪我は？」
瑞稀「はっとして、床に転がっている包
丁に手を伸ばす。
透子「駆け寄り、瑞稀の手首を押さえつ
けて包丁を遠くへ放る。
尚も包丁の方へ腕を伸ばそうとする瑞稀。
透子「その手首を強く掴んだまま、もう
一方の手を沙月の髪の間を滑り込ませ、
首筋に触れる。」

○同・洗面所

風呂場からシャワーの音。
ドアのすりガラスに淡いピンク色の泡が
付着し、ゆっくりと滑り落ちていく。
× × ×
瑞稀の腕をタオルで拭いてやる透子。
白い素肌に所々痣らしき跡が。
気づき、手を止める透子。
瑞稀「自分でやりました」
透子「(瑞稀の目を見て)……」
瑞稀「本当です。弟のことぶったりした後
どれくらい痛かったか確かめるために」
瑞稀の髪に手を伸ばす透子。
瑞稀「半歩身を引き、
透子「わかると安心するから。せいぜいこん
なもんだって」
透子「……」
伸ばしかけた手を下ろす。

○同・玄関

ドアの鍵をそっと閉める透子。
自分の靴と瑞稀の靴を取り、廊下を歩い
て行く。

○同・ダイニング

透子、沙月の死体に歩み寄り、しゃがみ、そつと髪をかき分けて顔を確認する。目が少し開いている。

透子「……ごめんなさい」

立ち上がり、自分の服の袖に血がついていることに気づく。

ダイニングテーブルを見る。

小さいケーキが置かれた方の席の背もたれにカーディガンが掛けられている。

透子「（再び沙月の死体を見て）……」

○同・階段

階段を上がって行く透子。

○同・瑞稀の部屋前

部屋の前で待つ透子。

着替えて出て来る瑞稀。

透子「（瑞稀を見て）……ちよつと待ってて」と孝一の部屋へ向かう。

○同・外・裏手

家の裏手にある一階の窓から地面に落とされる透子と瑞稀の靴。

○住宅街・道

瑞稀の手を引く透子。

透子「走るよ」

ボーイッシュな服装の瑞稀、プロ野球チームの帽子のつばから目を覗かせ、

瑞稀「逃げられないよ」

透子「逃げろって言っていない」

ぐいぐい手を引き、

透子「走る」

走り出す透子。

引っ張られる瑞稀。

○戸越家・リビング

時計を見ながら電話をかける戸越。

それを見ている孝一。

○道

走る透子と瑞稀。

○佐田家・内

携帯の着信音が鳴り続けている。

○佐田家前の道

微かに漏れ聞こえる着信音。
敷地内の様子を窺い、ざわつく記者ら。

○小さな駅・改札外

薄暗い駅構内。
切符を買い求める透子。
少し離れた所に立ち、改札の向こうの明るいホームを呆然と見ている瑞稀。
その様子を駅員が怪訝な顔で見る。
切符を二枚手にした透子、その駅員の視線に気づき、

透子「(瑞稀に向かって大きめの声で)ほら行くよ、ミッル。おじいちゃん待ってるから」

と改札へ向かう。

ついて行く瑞稀。

瑞稀から目を離し、業務に戻る駅員。

改札を抜ける透子と瑞稀。

○走る電車の中

人の疎らな電車内のボックス席。

斜めに向かい合って座る透子と瑞稀。

通路の方を見る瑞稀の視線の先には、週

刊誌の中吊り広告。

『少女Aとの密会を重ねる謎の女流作家、その素顔に迫る』という見出しとともに、

透子のモノクロ写真が掲げられている。

透子、おにぎりとおペットボトルのお茶を

瑞稀に差し出し、

透子「はい」

瑞稀、受け取り、

瑞稀「逃げられないよ」

透子「知ってるよ」

自分のお茶のキャップを開け、一口飲み、外の景色を見る。

瑞稀「何がしたいのかよくわかんない」

透子「（外を見たまま）ね」

瑞稀、少し首をひねり透子を見る。

外を見続けている透子。

瑞稀、お茶を開け一口飲んで、外を見る。

窓の外を流れるのどかな風景。

○走る電車の中（夕方）

先ほどとは別の電車の中。

同じ車両に他の乗客が一人。

長椅子に一人分くらいの距離を空けて座

っている透子と瑞稀。

透子、携帯を取り出す。

着信履歴13件。古い順に『○○出版・楠田

さん』から2件、『母』から6件、その他

登録のない番号からとなっている。

電源を落とす透子。

小さな駅で停車する電車。

乗客が降り、車両内は透子と瑞稀の二人

だけになる。

走り出す電車。

やがて電車は海岸沿いに差し掛かる。

夕日が沈もうとしている。

その景色を見つめる瑞稀。目に光が入る。

それを横で見守る透子。

透子「気に入った？」

瑞稀「夕景を見つめたまま、

透子「……お母さん、死んでた？」

透子、顔をこわばらせ、着ているカーデ

イガンの袖を軽くさすり、

透子「死んでた」

瑞稀「ずっと怖かった。私が居ても、居なく

なっても、この人死んじゃうんじゃないか

って。だけど初めて安心できたんです。（自

分の右手を見つめ）なんか、すごくあった

かくて……お母さん。本当にあったかかっ

た。（右手の親指と人差し指を擦り合せなが

ら）でも長く続かなかった。なんでかな」

言い終え、顔を上げる瑞稀。
外の景色はポツポツと家が建つ住宅街になっ
ていてる。

透子、黙って少し距離を詰める。
カーディガンの袖が、かすかに瑞稀の腕
に触れている。

透子「……あなたはお母さんに強さを求めた。
あなたを圧するだけの強さを。でもそれが
見出せなかったから、次は相手の弱さを決
めつけて自分を抑えつけることにした」

電車の速度が落ちていく。

電車のアナウンス「えー、まもなく終点〇〇、
まもなく終点〇〇でございます」

透子「ーだけど、あなたが居ても居なくても、
お母さん死ななかつた。あなたが殺すまで。
そうよね？」

震える瑞稀の手。

透子、その手に自分の手を重ね、

透子「確かにあなたに求めるほどは強くなか
ったかもしれないけど、あなたが思うほど
弱くもなかつた」

電車が停まる。

電車のアナウンス「終点〇〇でございます。
お降りの際は忘れ物などなさいませんよ
うお気を付けてください」

透子「あなたは、人の犠牲を恐れる振りして、
自分の自由を恐れていたの」
ドアが開く。

透子「怖いものは受け入れないから怖いのもよ、
いつまでも。(開いたドアを見て)……どっ
ちでもいいけど」

瑞稀、黙って席を立つ。

○佐田家・ダイニング(夕方)

複数の刑事が沙月の死体を囲い、現場保
存のための作業をしている。

ドアの前に立つ孝一。片手に家の鍵を握
っている。目の前の光景をじっと見据え、
微動だにしない。

その背後に戸越。孝一の肩を抱き、この

場を離れようと促すが、孝一は応じない。

○フェリー乗り場・ロビー（夜）

ベンチに並んで座っている透子と瑞稀。前方にテレビが設置されている。画面には、規制テープの張られた佐田家前から実況するリポーターの姿。その右下には『○○県中学校重り落下事件少女の母親死亡・保護観察処分決定直後の悲劇』とのタイトルが。

リポーターの声「尚、一部目撃者の情報によりますと、被害女性の夫との親密交際が噂されていた遠野マスオという女性作家がこの家の敷地内に侵入したまま、出て来る姿が確認されていないとのこと。現在この女性との連絡が取れなくなっていることから、警察では少女とこの女性が一緒である可能性が高いと見て行方を追っています」

テレビの音をかき消すように、フェリー

場内アナウンス「これより屋久島行フェリー

○号の乗船案内を開始いたします。お車なしでご利用のお客様は、旅客搭乗口までお越しく下さい」

透子「よし行こ、ミツル」
透子、席を立ち、テレビを見る瑞稀に、
瑞稀、帽子のつば越しに透子を見上げる。

○衛の部屋（夜）

暗い部屋。

テーブルの上で鳴り続ける携帯の光が、それを見つめる衛の顔を浮き上がらせる。画面には『孝一』と表示されている。衛、携帯に伸ばしかけた手を止め、テレビのリモコンを取る。

○フェリー・客室（夜）

壁に背を付け、わずかに距離を空けて座っている透子と瑞稀。
やはりテレビで続報を伝えている。

アナウンサーの声「検屍の結果、女性の腹部には包丁で十字に深く切り込みを入れたような痕があり、さらにその傷口が大きく開き、内部にも複雑な損傷が見られたとのことです。現場に残されていた少女の衣服の状態などと照らし合わせ、おそらく刺殺された後に、少女が何らかの意図をもって傷口からその腹部内に右手を挿入し中を弄るなどしたのではないかと――」

透子、口元を押さえ、立ち上がる。
瑞稀、それを見上げる。

○衛の部屋（夜）

テレビの光で青白く浮かび上がる衛の顔。一切の表情がない。

○フェリー・洗面所（夜）

口元をハンカチで拭き、鏡を見る透子。
しばし呆然としている。
女性乗務員がその鏡に映り込む。
乗務員、鏡越しに透子の様子を窺い、
乗務員「よかったら酔い止めありますよ？」
透子、はっと気づき、
透子「……いえ、大丈夫です。（笑顔を作って振り返り）ありがとうございます」
乗務員「いいえ。何か困ったことがあったらお声掛けくださいね」
と微笑み、去って行く。

○同・客室（夜）

戻って来る透子。
瑞稀の姿がない。
血相を変えて探しに行く透子。

○佐田家・孝一の部屋（夜）

必死に何かを探している孝一。
戸越、その様子を背後から見つめ、
戸越「孝一、もう行こう。先生が後で買ってやるから」
孝一、振り向き、わっと泣き出し、

孝一「そんなの要らないよ！あれはお母さんが俺に買ってくれたやつなんだから！」

戸越「……」

刑事「刑事がやって来て、どうされました？」

○フェリー・デッキ（夜）

月明かりに照らされるデッキ。

瑞稀が海面を見つめて立っている。

手すりを掴む瑞稀の手。

直後、首に黒い髪の毛の束が掛けられる。

咄嗟に手すりを離し、首元の髪を掴む。

振り向くと、透子が自分の髪の毛の束で瑞稀

の首を締め上げるようにして立っている。

透子「まだだよ」

瑞稀、首元の髪を手前に引きながら、

透子「もういいって！」

するりと髪を解き、両腕で瑞稀の体を抱

き寄せる。

必死に手すりに手を伸ばし、暴れる瑞稀。

被っていた帽子が飛び、海面に落ちる。

それを見て、ぱたりと大人しくなる瑞稀。

○同・客室（早朝）

眠っている透子と瑞稀。

瑞稀の右手首が透子の髪で括られている。

客室前の廊下を通りかかる乗務員、二人

の様子を訝しげに見る。

○戸越家・ダイニング（朝）

椅子に座り、携帯を耳に当てる孝一。

電話のアナウンス「電波の届かない所にある

か、電源が入っていないため」

簡単な朝食をテーブルに並べる戸越。

電話を切る孝一。

戸越、孝一の頭を撫で、

戸越「食べたら行ってみようか」

孝一、真っ赤な目で戸越を見る。

○屋久島・港（朝）

フェリーが着く。
降りて来る人々。
その流れの中に透子と瑞稀の姿もある。
瑞稀は透子の少し後ろを歩き、辺りをキョロキョロ見回している。

○走るバスの中

並んでバスに揺られる透子と瑞稀。
窓際の瑞稀、外の景色を眺めている。
緑や海、時々民家や学校などが見られる。

○走る車の中

運転席に戸越。助手席に孝一。
孝一、窓の外の溪流を見下ろしている。

○走るバスの中

窓の外は一樣に杉林。
通路側の透子はうとうととしており、カクン、カクンとなる首の動きに合わせて、時折瑞稀の肩を髪がかすめる。
透子を見る瑞稀。

その髪の一部、うねった毛先に目が行く。
瑞稀、そっと手を伸ばし、それに触れようとする。

運転手の声「次はヤクスギランド前、次はヤクスギランド前」

透子、目を覚ます。

瑞稀、手を引つ込め、視線を窓の外へ。
透子、『降ります』ボタンを押す。

○トンネル前

戸越の運転する車がトンネルに入る。

○フェリー・客室

客室の布団を畳む乗務員。
ふとテレビのニュース番組が目に入る。
週刊誌に載っていた透子のモノクロ写真が映し出されている。
手を止め、テレビに見入る乗務員。

○ヤクスギランド

深い緑の中を歩く透子と瑞稀。
木々の間から鹿の親子が見ている。
雨が降り出す。
瑞稀、前を行く透子に、
透子「ここに連れて来たかったんですか？」
透子「まだだよ」
と向き直り、どンドン先へ行く。
ついて行く瑞稀。

○山道

ずんずん歩く瑞稀。
遅れをとる透子。
瑞稀、前方に何かを発見し、振り返り、
透子「猿、猿います」
透子「笑い、距離を詰める。」

○屋久島・港付近

路肩に停められたバス。
宮川が運転席の窓に警察手帳をかざし、
運転手から話を聞いている。
宮川「どうもありがとうございます」

バスが出る。
宮川、その後方に停められていた黒い車の助手席に乗り込む。
運転席の窓が開き、そこから出て来た手によって屋根にパトランプが設置される。
発進する車。

○山道

雨の中、険しい山道を進む透子と瑞稀。

○ヤクスギランド・前

パトランプを点滅させ、杉林に囲まれた道を上がって来る車。
ヤクスギランド前で停止する。
降りる宮川ともう一人の刑事・田村（32）。

○同・入場口

券売窓口の職員に警察手帳を見せ、話を聞いている宮川。

宮川「じゃあまだこの中に？」
職員「ええ、ただ……」

○同・内

矢印型の看板前で立ち止まる宮川と田村。
宮川「（看板を見て）山か」

田村「山ですね」
看板には『太忠岳 Mt. Tachū』とある。

宮川「ぬかるみに残るスニーカーの足跡を目で追い、その先の山道を確認して、

宮川「なんでこんなところに山があるんだよ」
田村「山からしたら、なんでこんなところにラ

ンド作ったんだよって話でしょうけど」
宮川「喧嘩売ってんのか」

田村「行きましよう。ホシはもう雲の上かも
しれませんよ」

宮川「笑えないんだよ、お前の冗談」
田村「自分、冗談とか言わないですけどね」

と軽快な足取りで歩き出す。
宮川、田村の足元に目をやる。

トレッキングシューズを履いている。
舌打ちをして歩き出す宮川。足には革靴。

○衛の部屋・居間

薄暗い部屋に煙が充滿している。

テーブルの上の灰皿には吸い殻が山盛り。
その周りや床に潰された箱が散乱。

衛、最後の箱を握り潰す。
震える手で吸い殻の一つを掴み、それに

火を点けようとする。
と、窓の向こうで物音。

カーテンに、外から窓に紙を貼り付けて
いるらしい人の影が映っている。

衛、吸い殻を戻し、そちらを凝視する。
人影が去る。

代わって宙に揺れる何かの影に目が行く。
ミシッ、ミシッという音が聞こえる。

窓に近づく衛。
カーテンを少し開ける。
レースのカーテン越しに、野犬の死骸らしきものが首に縄を掛けられ、物干し竿から吊るされているのがわかる。
カーテンをまた少し開ける衛。
窓に『今こそ その手で 死刑 殺処分を』
と記された紙が貼られている。
それをじっと見つめる衛。

○山道

険しい山道を速足で行く田村。
後方で、足を滑らせる宮川。

気づいて振り返る田村。

田村「大丈夫ですか？」

軽く手を挙げ、大丈夫だと合図する宮川。
しばし待つ田村。

× × ×
歩調を合わせて進む宮川と田村。

地面に所々見られる二人分のスニーカーの足跡に目を落としつつ、

田村「まだ二人分」

宮川、舌打ちをし、少しペースを速める。

宮川「しかし、あの女もよっぽどだよな」

田村「？」

宮川「イカれてるよな、って。本読んだろ？」

田村「ああ。でもあれですよ、榊野透子名義

では旅行本とかも書いてて。この島のこと

も載ってました。まあ文章は、如何にもそ

れらしく無難に、って印象でしたけどね」

宮川「そういう人間が一番厄介なんだよ。ど

うかしてるって自覚がある分、まともな人

間以上にまともに振舞うんだからさ」

田村「元来そういうものじゃないですかね、

まともさって」

同じ歩調で進み続ける二人。

○衛の部屋・台所

ドアノブにネクタイの一端を括り付ける
衛の手。数本のネクタイが固い結び目を

成して連なり、長い紐状になっている。

○太忠岳・山頂

岩場に吊るされた縄を掴む瑞稀の手。
その縄を頼りに、岸壁を登って行く。

○衛の部屋・居間

閉められたドアの上部からネクタイの紐
がこちら側へ下がっている。
それを手で引き、強度を確かめる衛。

○太忠岳・山頂

ついに頂上の岩場まで登り切った瑞稀。
あちこちから猿の鳴き声などが聞こえる。
目の前にそびえる大きな岩の柱に圧倒さ
れ、立ち止まり見上げる。
太陽の眩しさに顔をしかめる。

○衛の部屋・居間

ふと窓の方を見る衛。
レースのカーテン越しの陽光が、げっそ
りと痩せこけた血の気のない顔を照らす。
衛「……私の命で許してください」

○太忠岳・山頂

岩場の端に立ち、下の景色を眺める透子。
瑞稀の方を振り返り、手招きする。
瑞稀、そちらへ行き、透子の隣に立つ。
今、二人の眼下には虹が架かっている。

透子「悪くないでしょ」

瑞稀、虹を見つめて黙っている。

透子「この島ね、月に35日雨が降るって言われ
てるの」

瑞稀、透子を見る。

透子「だから多分、30日ぐらいは虹だって出て
るんだろうね」

瑞稀、再び虹を見る。消えかかっている。

透子「奇跡でも何でもない。こういう現実も、
探せば世の中いっぱいあるんだと思う」

瑞稀「（被せて）もう遅いんです。私はもう自

由を放棄したんです」

虹が完全に消える。

透子「（呟く）放棄なんかできないよ」

瑞稀「……疲れた」

透子「少し休もうか。追手も来ないし」

× × ×

今度は二重に虹が出ている。

岩場に並んで座っている二人。

瑞稀は透子の肩にもたれて眠っている。

光に透ける瑞稀の髪が風に揺れる。

透子「（小さな声で）ごめんね。ほんとは私が

来たかっただけだ」

透子の肩にもたれたまま瞬きをする瑞稀。

透子「付き合ってくれてありがとう」

やがて瑞稀の目から静かに涙が流れ出す。

瑞稀「……ずっと前、曾祖母ちゃん死んだ時、

誰もいない裏庭であの人泣いてた。弟負ぶ

って、その辺ふらふらしながら」

透子、肩に染みた涙に気づき、瑞稀の顔

を窺う。

瑞稀「初めて見た母の涙でした。なんか綺麗

だった。弟は何も知らずに眠ってたのかな。

それでも、ただ背負われてるだけで、あの

人の支えになれてるんだって思った。あん

なにも無力なのに。私はずっと隠れてて、

それを見なかったことにすることしかでき

なかった」

透子、遠慮がちに瑞稀の髪に触れ、そっ

と撫でる。

瑞稀「……違う。私、あの時自分がどこでど

うやってそれを見たのか思い出せない。

でも確かにそれが見えていて、私がそこに

必要のないことだけは明らかだった」

瑞稀の視線の先で虹が消える。

頭を離し、透子を見て、

瑞稀「私、いる？」

透子「……私は？」

瑞稀「？」

透子「私にはあなたが見えてる。だからもし

あなたにも私が見えてるとしたら、お互い

いるってことでいいんじゃないかな」

透子の目をじっと見る瑞稀。

応じる透子。

透子、少し戸惑いながら、瑞稀をそっと抱きしめる。

透子「いる」

そのまましばし沈黙する二人。

瑞稀、やがて自分の胸の辺りに手を当て、

瑞稀「お母さん動かなくなってるからずっと、

この辺ぎゅーって握られてるみたいな感じ

で。なんか、痛くて……」

透子、瑞稀の背中をさする。

瑞稀「こういうのが罪悪感？」

透子「そうかもしれないね」

また薄っすらと虹が出て来る。

それを見る瑞稀の目に光が宿る。

瑞稀「……だとしたら、気持ちいい」

辺りの森から猿の鳴き声が大きく響く。

瑞稀の背中をさすっていた透子の手が止

まる。直後、その手で自分の口を押さえ、

反対側を向き、嘔吐する。

瑞稀、透子の背中に手を伸ばし、

瑞稀「だいじょ」

透子、反射的に瑞稀の手を払いのけ、立

ち上がり距離をとる。

透子「……ごめん」

自分の腹に手を当て立ち尽くす。

瑞稀、困惑した表情で見上げ、

瑞稀「怒ったの？」

透子「(首を横に振り)あなたに怒ってるんじ

ゃない。私、自分だけはあなたを救えると

思った。あなたを救うことで、自分が救わ

れようとした。そういう自分が、気持ち

悪くなっただけ」

瑞稀「……やだ」

立ち上がる瑞稀。

瑞稀の座っていた岩面に血の跡が残る。

それを見る瑞稀。

透子の視線もそちらへ。
瑞稀、しばし自分のズボンに滲む経血を

見つめた後、再び透子に視線を戻し、
瑞稀「見捨てないで」

と歩み寄る。

どこからかミシッ、ミシッという音が。
透子、自分の腹をさすりながら後ずさる。

○衛の部屋・居間

玄関のチャイム音が響き渡る。

男の声「佐田さん、佐田さん、ご無事ですか？
警察の者です。いらつしやいましたら少し
出て来ていただけますか？」

無視して、ネクタイの輪に首を掛ける衛。

○太忠岳・山頂

距離を空けて対峙する透子と瑞稀。

岩場まで登って来て一息つく宮川。

続いて田村も岸壁から顔を出す。

宮川、二人に歩み寄り、警察手帳を見せ、
宮川「佐田瑞稀ちゃん、榊野透子さんですね」

透子、瑞稀から宮川へ視線を移し、手で
口元についた吐物を軽く拭い、

透子「はい」

瑞稀は透子を見つめたまま黙っている。

宮川、瑞稀の方へ行き、肩に手を置き、
宮川「行こうか」

瑞稀、尚も透子から視線を逸らさず、
瑞稀「……ずるいよ」

透子「ごめん」

田村、透子の元へやって来て、ポケット
ティッシュを差し出す。と、眼下の虹に
気づき、小さく感嘆の溜息を漏らす。

宮川、瑞稀の肩を強く掴み、

宮川「さ、行こう」

暴れ出す瑞稀。必死に抑える宮川。

瑞稀「もういい！死ぬ、ここで死ぬ！」

立ち尽くす透子。

その隣に、冷めた目で傍観する田村。

田村「(ボソッと)ここから飛んだらもれなく

天国」

透子、一瞬田村を見る。

宮川「おい、田村！」
田村、小走りで近づき、宮川に加勢。
瑞稀「死なせる！私の命だ！」
透子、歩み寄り、瑞稀にピンタ。
暴れるのをやめ、充血した目で透子を睨みつける瑞稀。
瑞稀「どうせ芯から腐ってる。死ななきゃ治らない」
透子「そんな奴いくらだっている」
透子「法も倫理も、あなたそのものを断罪するものじゃない。あなたとあなた以外の人間との間で、最低限守られてればいいだけのこと」
宮川、田村、瑞稀を抑える力を緩める。
透子「全てを許されようだなんて思うから、その境界を見失うの。善悪の問題じゃない。ただ甘えてるだけ。あなたも私も」
宮川、瑞稀の腕を引き、
宮川「よし、行こ」
瑞稀、一瞬引っ張られるが、抵抗し、その場に留まり、
瑞稀「…：一人にしないで」
透子、着ていたカーディガンを脱ぎ、瑞稀の腰に巻きながら、
透子「皆一人。全部はわかり合えないから、人は他人に飽きないんでしよう。秘めるべきところは秘めて、一人で強く生きなさい」
瑞稀、また宮川に腕を引かれ、透子の腕にしがみつく。
透子、瑞稀の手を自分の腕から引き剥がし、そのままぎゅつと握りしめ、
透子「…：瑞稀ちゃん、瑞稀、佐田瑞稀。私はあなたを忘れない。他には何もできないけど、それだけは約束する」
透子の目をじっと見る瑞稀。
透子も強い視線を返し、
透子「ごめんね。ありがとう」

瑞稀の手を離す透子。

瑞稀「……」
自ら歩き出す瑞稀。

○衛の部屋・居間

どんどん紅潮していく衛の顔。

それに伴い、外から聞こえる警官の声、チャイム音などが遠のいていく。

やがてバンバンバンバンと必死でドアを叩く音が混じり、

孝一の声「お父さん、開けて！お父さん、お父さん、お父さん……」

次第に孝一の声が大きく響き出す。

孝一の声「……お父さん！」

衛、目を見開き、震える手で首元のネクタイを掴み、ワーツと叫び声を上げる。

するとドア上部の角に当たっていた結び目が解け、衛の体は床に転げる。

衛、息も絶え絶えに玄関へと這って行く。

○火葬場・外

煙突から昇っていく煙を見上げる孝一。

○同・待合室

さっぱりと髭を剃り、黒いスーツに身を包み、黒いネクタイを締めた衛がいる。

その向かいに沙月の父・武夫（65）と母・峰子（63）が並んで座っており、他には誰もいない。

衛、床に手をつき、頭を下げ、

衛「本当に、申し訳ございませんでした」

武夫「よして、衛君。きっと沙月にも責任があつたんだらうから」

峰子「（堪えていた涙を流し、衛に）あなた、沙月のこと全力で守っていくって、私たちにそう約束しましたよね」

武夫「（峰子を押さえ）母さん」

峰子「（衛に詰め寄り）あなたは結局、自分の家を守ることに必死だっただけなんですよ。お骨はこちらで預かりますから」

そろそろと顔を上げる衛。

衛「それは……それは勘弁してください。子供たちに、母親と生きてきた年月を忘れさせたくないんです」

峰子「だから……もう、どうして。あの子は、孝一や……孝一や、瑞稀の母親である前に、私たちの大事な娘なんですよ。どうしてわからないの」

武夫「母さん、沙月は嫁に遣った子だ」

武夫を睨みつける峰子。
いつの間にか孝一がドアの前に立ち、その様子を見ている。

○鑑別所・面会室

テーブルを挟んで向かい合う衛と瑞稀。
衛「お母さんのお葬式、無事済んだよ。お姉ちゃんがまた社会できちんと生きていけるようになったら、一緒に納骨しような」

瑞稀「……あの人とお母さん、どっちが好きだった？」

衛「どうしてそんなこと。決まってるだろ」

瑞稀、衛の目を見る。

衛の瞳が微かに揺れる。

衛「そうだな。俺、考えたことなかったんだ」
瑞稀から目を逸らし、

衛「お姉ちゃんや孝一……瑞稀や孝一が生まれてからずっと、沙月はお前たちの母親で、俺もお前たちの父親で。そういうものだから、当たり前前だと思ってた。悪かったよな」

再び瑞稀と目を合わせ、

衛「ごめんな、瑞稀」

瑞稀「……（ただじっと衛を見ている）」

○佐田家・外（夕方）

家の前の道にトラックが停まっている。少し離れた所に野次馬らしき人々も。

衛「トミックの運転席の窓に向かって、衛「じゃあ、すいませんが、お願いします」
発進するトミック。」

○同・内（夕方）

がらんとした家の中。

玄関にぼつりと座る孝一の背中。

ドアが開き、衛が現れる。

衛「行こうか」

孝一、膝に載せていた骨箱を両腕で抱え、立ち上がる。

○拘置所・独房

職員に案内され、中へ入る透子。

独房内の壁は、淡いピンク色のクッション材で覆われている。

透子、歩きながらその壁を撫で、

透子「母親の胎内ってこんな感じですかね」

職員「……」

×

×

×

ドアが開く。

妊娠検査薬を差し出す職員。

職員「念のため」

透子、受け取る。

○裁判所・法廷

刑務官に挟まれて被告人席に座り、俯き

加減の透子。

証言台には衛が立っている。

検察官が立ち上がる。

検察官「証人に質問します。あなたが、そこ

はもう自分の家ではないとおっしゃって」

弁護士「（立ち上がり、検察の質問を遮って）

「そこはもう誰の家でもありません」です」

検察官「（一息つき）そうおっしゃって被告人

を見送ったのは、だいたい何時くらいだっ

たと記憶していますか？」

衛「（しばし考え）確か——」

×

×

×

検察官、立ち上がり、

検察官「最後にもう一点お伺いします」

検察官に視線を向ける衛。

検察官「被告人は現在妊娠中とのことですが、」

俯いていた透子も検察官を見る。
検察官「証人との間に出来た子である可能性
はございますか？」

衛「透子、透子を見る。
透子、目を逸らす。
衛「：：：わかりません」

○拘置所・独房（夜）

便器に向かつて嘔吐する透子。
吐き気が収まり顔を上げると、斜め前に
髪の毛の長い少女らしき人影が蹲っている。
よく見るとそれは、影そのものが立体化
したような薄黒い人体であり、髪や体に
蜘蛛の糸のようなものが絡みついていて
それを見据え、手で口元を拭う透子。
糸を引いている。

○同・面会室

分厚いガラスを挟み、透子と衛が向かい
合って座っている。お互い俯き加減。
衛「子供：：」

透子「俺の子ですか」

衛「俺も顔を上げ、
透子「だったら何ですか」

衛「俺には守っていかねばならない子供
たちがいます。申し訳ないですが」

透子「安心してください。私も一人で守って
いきます」

衛「そう簡単なことじゃ：：」

透子「わかってます」
衛「それに：：（俯き）生まれてこない方が
幸せな命だつてあるんじゃないですか」

しぼしぼと衛を見る透子。
その目が次第に赤らんでいく。

バン！
思い切りガラスを叩きつける透子の手。
顔を上げる衛。

バン、バン、バン：：何度も叩く透子。
撓むガラス、歪んでいく透子の顔。

看守が駆け寄り、ガラスの前から透子を引き離す。
透子、看守に引かれながらも衛を見て、透子「この子は、あの子じゃない……あなたでもない。私でも絶対じゃない！」
衛、出口の方へと連行されていく透子を呆然と見ている。

○同・独房（夜）

透子の前にまた薄黒い少女が立っている。透子、それに近づき、捕まえてみる。両手で少女の肩を掴み、その顔を見る。輪郭の曖昧な闇の塊が顔型を成しており、目に当たる部分は一際黒く深い空洞のようになっっている。
透子、その空洞を見つめ、ゆっくりと両手を少女の首元へ移動させ、力を込める。少女は一切表情を変えず、逃げようともしない。
少女の影に飲まれていく透子の手。

○同・独房前（夜）

職員が一人やって来て、ドアの窓から中の様子を窺う。
何もない独房内に、鬼のように真っ赤な顔をして両手に力を込める透子の姿が。ふっところちらを向く透子。
職員と目が合うと、静かに両手を下ろす。

○鑑別所・面会室

テーブルを挟んで瑞稀と衛が向かい合っており、衛の隣に孝一が座っている。じつと瑞稀を睨みつけている孝一。目を伏せている瑞稀。
衛「じゃあ、瑞稀、また来るからな」
小さく頷く瑞稀。

衛「よし、行こうか、孝一」
立ち上がるようにする衛。

孝一「（低く唸るような声で）……死ねよ」

孝一を見る衛。

目を逸らしたままの瑞稀。

孝一、勢いよく椅子を弾き飛ばして立ち

上がり、小さな拳でテーブルを叩きつけ、

孝一「死ねよ！ さっさと死ねって！」

衛「孝一」

と肩を掴む。

孝一、それを振り払い、

孝一「お前なんか生まれてこなきや……死ね

ないんだったら俺が殺してやるよ！」

とテーブルの上に上り、瑞稀に掴みかかり、

首に手をかける。

無表情でされるがままの瑞稀。

衛と職員、止めに入り、孝一の体をテ-

ブルから下ろす。

瑞稀、ゆっくりと顔を上げ、孝一に強い

視線を向ける。

瑞稀「消えてあげない」

孝一、大きな叫び声を上げ、暴れ回る。

衛と職員、これを必死で抑え、出口の方

へと促す。

強い視線のまま、それを見ている瑞稀。

衛、暴れる孝一を抱き留めながら、真っ

直ぐ瑞稀の目を見て、首を小刻みに縦に

振る。

口を真一文字にして衛を見つめる瑞稀。

衛と孝一が出て行き、ドアが閉まる。

直後、大きく開かれたままの瑞稀の両目

から、ポロツ、ポロツと涙が落ちる。

そのまま深々と頭を下げる瑞稀。

そこに裁判長の声が重なる。

裁判長の声「尚、精神鑑定においても、多

少の不安定さは見受けられるものの、これ

は同年代の少年少女と比して特段の差異を

認めるほどのものではなく――」

○家庭裁判所・審判廷

頭を下げている瑞稀。

正面で審判決定を読み上げている裁判長。

裁判長「よってここに佐田瑞稀の少年院送致

を決定いたします」
より深く頭を下げる瑞稀。
その斜め後ろで衛も頭を下げる。

○拘置所・面会室

分厚いガラス越しに透子と彩乃。

透子「ごめんね。色々迷惑かけちゃって」

彩乃「あんたが無事でよかった」

透子「お父さん、呆れてるよね」

彩乃「(笑って首を横に振り)悠ちゃんたち遊びに来た時はしゃいじやって、腰傷めたのよ。だから長いと乗り物辛いって言うんで」

透子「そう。ちよつと心配だけど、楽しそう
でよかった」

彩乃「ほんと。私たちにはあんなに頑固だったの
にね」

透子、笑う。

彩乃「家で待ってるって。早くこんなところ出
て、帰って来てあげて」

透子「ありがとう。だけど、(俯き)ちよつと
もう……ね」

彩乃「透子、ごめんね。あの記者の人が置いて
った本、読んでみたんだけど、正直よく
わからなかった」

透子「(頷き)それでいいの」
彩乃「でも、なんだかね。子供の頃からずつ

と、あんたのこと何もわかってやれないで、
いい所を潰してきてたんじゃないかなって
ね……私がきつとバカだったから」

透子「(必死で首を横に振り)違う。お母さん
たちとの関係は、他に代えようのないもの
だから壊したくなかった。でも、自分の中
にある得体の知れないものも、なくしたら
生きられなくなるような気がして。だから、
殺しながら生かしてきた。そうすることを
自分で選んでやってきたの」

彩乃「……そっか」

透子「寂しい思いさせてごめんね」

彩乃「(首を横に振り)透子がそれで、どこか
私たちの知らない所で、逞しく笑って生き

透子「あるんだったら、私はそれが嬉しい」
彩乃「（明るく笑い）けど時々は元気な顔見せてよね。お父さんもお母さんも、本当にいつでも透子のこと待ってるから」
透子、微笑み、頷く。

○同・独房（夜）

少女の影と対峙する透子。
躊躇いながら手を伸ばし、それをそっと抱きしめる。
透子「いい。消さないよ」
透子に抱かれ、やや上を向く少女の顔。
小さな窓から射す月明かりに照らされる。
二つの深い空洞の奥で、液体らしきものが微かに光を反射している。
透子の黒く長い髪を、小さな手が優しく撫でる。

○走る護送車の中

カーテンの閉め切られた後部座席。
外からヘリの音が聞こえている。
二人の職員に挟まれて座っている瑞稀。
背筋を伸ばし、真っ直ぐ前を向いている。
車体の揺れで、運転席と後部座席とを仕切るカーテンに僅かな隙間ができる。
瑞稀の顔に細長い光の筋が射す。

○拘置所前の道

荷物を持ち、拘置所の門を出る透子。
塀に沿った道の上で立ち止まる。
透子の右手、少し離れた路肩に一台車が停まっている。
透子、やや膨らんだ腹に手を当て、
透子「どっちだ」
しばしの沈黙の後、
透子「（微笑み）強い子」
と左へ歩き出す。

確かな足取りで歩き続ける透子。
後ろの方で車のドアが開く音がする。

○車の中

運転席側のドアを開け、外へ出ようとしている衛。

助手席に置かれた携帯が鳴る。

ドアを閉め、出る。

衛「はい」

透子の声「梶野です。色々にご迷惑をおかけしました」

バックミラーを見る衛。

○拘置所前の道

耳に携帯を当て、歩き続ける透子。

透子「おかげさまで無事娑婆でございます」

○車の中

衛、ミラーの中で遠ざかっていく透子の

後ろ姿を見つめ、

衛「……」

透子の声「笑ってくださいよ」

衛「いや……」

○拘置所前の道

透子、立ち止まり、

透子「わかってるんです。あなたと同じ恐れ

が私にもあって。きつと繰り返し返す。どんな

に気を付けたって、気を付けてるって自覚

がまた無自覚な過ちを生む。怖くてしょう

がないです」

○車の中

衛、ミラーの中の透子を見つめたまま、

何も言えずにいる。

○拘置所前の道

透子「顔を上げてゆっくり歩き出し、

透子「でも、この子には力がある。自分で自

分を生かす力も、自分で自分を殺す力も、

全部この子が持っている。与えることも奪う

こともできない」

○車の中

無言で頷く衛。

透子の声「せめてそれだけ忘れずに、見守っていききたいと思うんです。頼りないかもしれないけど、わかってくれますか？」
再びドアを開ける衛。

○拘置所前の道

透子、振り返り、荷物を地面に置き、手を前にかざしてストップと合図。
透子「祝福してください。この子のこと。私のこと」

衛「車の横に立ち、透子を見つめ、」

透子「それだけで十分ですから」

衛「……おめでとう。おめでとうございます」

透子「深く頭を下げ、」

透子「ありがとうございます」

それから顔を上げて微笑み、電話を切る。荷物を持ち上げ、衛に背を向ける透子。

○車の中

衛、再び運転席に乗り込み、バックミラーを見る。
「」
どんだん小さくなっていく透子の姿。
エンジンをかける衛。

○拘置所前の道

背後で小さくなっていく車。
前を向き、歩き続ける透子。

へ了へ